
ハーレムなんかにまきこむな！

池中織奈

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハーレムなんかにまきこむな！

【Nコード】

N2680T

【作者名】

池中織奈

【あらすじ】

成績優秀、運動神経抜群、魔術の腕は宮廷魔道士以上、魔力量異常、正義感が強く女性に優しい、おまけに鈍感で、知らない間にハーレムを作成しているのは、僕の幼なじみの、ルークだ。

ルークと僕は共に育ってきた、幼なじみだ。ルークの事は、大事な親友だと、思ってる。

だけど、大きくなるにつれて、だんだん面倒になってきた。

……僕を、ルークのハーレム騒動に巻き込まないでくれ！

プロローグ

昔からそうだった。

昔からルークは、何でもできる奴だった。

ルークは公爵家の息子だった。

僕はただのルークの家に仕える庭師の子供だった。

ルークは魔法の天才だった。

僕はルークには及ばないけど、魔法の才能だけはあった。

ルークは剣術でも天才だった。

僕は剣術の才能はなかった。だから弓を鍛えた。

ルークは育つにつれ、イケメンに育った。

僕は一般的に言う平凡な顔だ。

ルークは運動神経もよかった。

僕はどちらかというと運動はそこまで得意ではない。

ルークは学園を首席で入学した。

僕は七番目の成績で入学した。

ルークと僕は、親友であり、幼なじみだ。

……大きくなるにつれて、ルークは着々とハーレムを形成していった。

正直ハーレム引き連れたルークは邪魔である。

「ねえ、ルーク君」

甘ったるい声を出すのは、黒髪的美少女。

「ノアさんってば、ルークに近づかないで」

そんな事を言いながらルークに抱きつく、茶髪的美少女。

「ルークはわたくしのものですわ!!」

なんていいながら、ルークの腕に抱きついている、金髪的美少女。

「お前達、ルークに近づくな! ルークは、わ、私のだ!」

なんて言い出す、巨乳の担任の美女。

…そして僕は隣で、その様子をただ見ながら、部活の研究をやっていた。

僕の所属する部活は、『魔法研究部』、魔法、魔法具、魔法陣…

…魔法とつくものをありとあらゆる方法で研究する部活だ。

僕が入ったからと、ルークまでもこの部活に入ってきて、なぜか担任の美女、アフライ先生がこの部活の顧問となり変わり、ルークに惚れている美少女三名もこの部活に入った。

はつきりいうと、この五人は邪魔である。

部長である、ケイト先輩なんて、口をひくつかせて、どうにかならないのかともいう目でルーク+そのハーレム陣を見ている。

本当に、邪魔である。研究を熱心に行っている面々からすれば、隣でイチヤイチャとハーレムを形成する姿は邪魔だ。それに加え彼女の居ない面々からは殺意を向けられても仕方がない事である、と僕は思う。

ケイト先輩は、どうにかしてくれ、と僕を見ている。

僕は大きくため息を吐いて、ルークにいった。

「ルーク、邪魔」

僕はルークに、邪魔といったのだ。ルークが居なくなれば、ハーレム陣も必然的にいなくなるのだ。だからどこかいつてくれと、僕はルークを見る。

だけど真っ先に反応を示したのは、ルークではなかった。

「ユウ君！ ルークさんに向かってその言い方はないでしょう！」腰までなびく、長い髪をなびかせた美少女の名は、ノア・メキシム。僕とルークのクラスメイトであり、男に絡まれていた所をルークに助けてもらったからという単純な理由でルークに恋心を抱く。

「そうよ。ルークに邪魔って！ ルークは何もしてないわ！」肩まで靡く短い髪を持つキリツとした瞳の美少女は、ミク・セルファード。同じく僕とルークのクラスメイトであり、隣の席で仲良くなつてルークの優しさに触れ惚れてしまったらしい。

「あら、このわたくしのルークが邪魔だなんて、あなたの方が邪魔ですわ」

そんな言葉を放つのは金髪の美少女、名前はルミ・アイワード。大貴族の令嬢で、一言でいえば偉そう。彼女もクラスメイトであるルークが自分をアイワード家の長女として見ず自身として見てくれるとかいつて惚れてるらしい。

「ルークをいじめるっていうなら、単位やらないからな！」

この横暴な担任の名前はアフライ・シュンドイル。困っていた所をルークに助けられ、ルークのイケメンスマイル（驚く事に大抵の美少女になぜかきく）にやられてしまったらしい、女性だ。

僕は何でこんなに責められてるんだ。何も特に悪い事なんてしてないだろう！ それを滅茶苦茶いつてやりたい。

「皆、ユウにそんなに言うな！ 邪魔してるのは事実なんだから救いなのは、ルークが取り巻き陣みたいに自己中ではない事だ。申し訳なさそうな目でこちらを見られたら、きつく言えないよなと思う。それにしても、ルーク自身はいいやつなのに、どうして周りを囲むハーレム陣は自己中どこか横暴なのだろうか。」

「…で、ルークは真面目に研究する気あるの？ あるならさ、騒

がないでやって。そのノアさん達もさ、研究しないならやめなよ、部活。正直研究の邪魔なのわからない？」

そう言っただけで、ハーレム陣にはきつく睨まれた。

僕は元々彼女達に目の敵にされている。なぜかという僕とルークが幼なじみで親友でよく一緒に居るからだ。彼女達からすれば二人つきりになりたいのに、その場に僕が居たりするわけである。

「俺、ユウと同じ研究したいって前からいってるじゃん！」

「いやさ、ルーク。別にルークが僕と同じ研究やるのは構わないよ？ でもさ、結局研究できてないじゃん」

「…すまない、ユウ」

「謝るのはともかくとして、本当にどうにかできない？ 真面目にやってくれないならさっさとやめなよ」

「でも、俺この部活がいい……」

「じゃあ、あのメンバーが騒ぐのどうにかしてって僕いつてるよね？」

「いや、でも……」

ルークは基本的に、好意を向けられて拒絶できない。そして、厳しく言うのをためらってしまう。

正義感が強いというか、なんとというか…、僕から見れば偽善者のな存在がルークである。僕はルークに比べたら冷たいと思う。正直友人とか、家族以外どうでもいいと思ってるし、このハーレム陣達の事に関しては面倒で嫌いである。

「はあ…とりあえずどうにかできないなら出てって。真面目にやってる人の邪魔だから」

邪魔だからどこかいけと、睨みつけられれば、ルークは悲しそうな顔をしながら、ハーレム陣を引き連れて研究室から出て行った。

……本当に、ハーレム陣達を引き連れたルークというのは面倒である。

さつさと恋人でも作ってくればハーレム陣も大人しくなるかも
しれないのだが…。
そんな事を思いながら、僕は大きくため息を吐いた。

昼食＋クラスメイト達（前書き）

プロローグ、少し変更

昼食＋クラスメイト達

「ルーク、これ私が作ったの！」

メキシムがそう言って、ルークにお弁当を差し出している。

それを見ながら周りのハーレム陣は自分もお弁当を作ってくればよかった。とでもいう風にメキシムを睨みつけている。

今僕はルークに引きつられて屋上に居る。昼飯を食べるため、なのだが、僕は此处に居る必要全くないと思う。ハーレム陣達が、ルークに気にいられようと必死すぎて、何だかなあ、と思う。

メキシムはお箸で、自分の作った卵焼きをつかんで、バカップルがやりそうな、あーんをやろうとしている。人前でそう言う事をする、なんて羞恥心はないのだろうか。そして、ルーク…、恥ずかしがつてるのは当たり前前の事だが、恥ずかしがつてるだけじゃ周りからは喜んでるようにも見えるぞ。

僕は昔からの付き合いだから、困ってるのなんとなくわかるけど、多分メキシムは照れ隠しで嫌だと言ってると思うてるだろう。

メキシムがルークにあーんをして、それを嫌がつてるルーク。そしてその様子を見つめながら、悔しそうな面々。やっぱり、僕この場に居なくていいよなあ？ と、再度思う。

正直ルークに、助けてくれとでもいうような視線を向けられても困る。僕はハーレム陣達になるべく関わりたくはないのだ。というより、めんどくさい。自分に向けられる好意ぐらい自分でどうにかすればいいのに…。ルークは驚くぐらい鈍感だし、恋愛感情を向けられてるのに気付いていないのかもしれないけど。

それでも、自分でどうにかしろよ、と僕は一応何度も言っている。しかしなんだろう、ルークは何と言うか、完璧超人ではあるが、僕から見たらヘタレにも見える。

「ルーク、僕食べ終わったから、先行くよ」

「ちょ、ユウ…待てっ」

さつさと食べ終えて、お弁当箱を片づけて、立ち上がれば、ルークの必死な声が響いた。

「いや、此処いてもする事ないし、戻る」

僕はそれだけ言っていると、何か言いかけているルークを置いて、僕は屋上を後にする。

屋上の階段を降りながら、僕は思う。大きくなるにつれて、ルークのハーレムはすさまじくなっている気がする、と。元々昔から女をやたらとひきつける奴だったのは、確かである。

僕には到底わからないけど、周りの少女たちからすれば、ルークにはそういう、惹かれる魅力があるらしい。まだ昔はよかった。こういう昼休みに一緒に昼食を食べながら、僕はルークと普通に会話を交わしていたし、ルークに好意を向けている人間は確かに居たけど、もう少しゆっくりできていた気がする。

そもそも、この学園で形成されたルークのハーレム達は、何と云うか、めんどくさいの一言に尽きる。僕がルークに厳しい事を言えば、すぐに暴言を吐いてくる。それに、今回のハーレム達は、なぜか成績上位者とか、実力者ばかりだ。それでいて、僕の成績が彼女達より低いからって、煩い。

…………… ああ、面倒だな。

そればかり思いながら、教室へと向かった。

教室の扉をガラツと、開けて、中へと入る。

クラスメイト達は、僕にちらりと視線を向けるだけだ。男子生徒達からは、ルークと仲良いからと突っかかってこられる事もある。というのも、ルークが超人でありハーレム達が恐ろしいから本人には何かできないからであるが…。そして、女子生徒達はハーレム陣に苛々している人も多い。それ以外にもルークに近づきたいからと僕に媚を売ってルークに近づこうとする女子生徒までいる。

そもそも、この学園は貴族が多い。名門学園というべきか、金持

ちが多いのである。だけど、僕は平民だ。別に学園なんて入るつもりなんて最初はなかったのだ。

この学園は13歳〜15歳が中等部。そして、高等部の16〜18歳は本人が望めば在籍できる。成人は15歳なのだから、そういう風になっているのだ。

そして、僕どうせお金もないし、入らなくていいと思っていた。

12歳まで父親に庭師としての仕事を仕込まれたり、ルークと仲良いからって事で一緒に学んだりしていた。それに、ある人に鍛えてもらったから、ルークが学園に行った後に、僕はそのある人の元に行こうと思っていた。

それなのに……ルークが僕と学園に行きたいと言って、そのままルークの父親であるアル様にまで頼まれ、そして学園に入る事になった。アル様には昔からお世話になっていたし、学べるものは学んでいた方がいいかと思っただし、ルークが居るならいいかと思っただし、入る事にしたのだ。軽い気持ちで。

それが、入学してすぐにこんなに嫌われる事態になり、ルークがハーレムを形成するとは流石に思っただけだった。同じ部活の人達とはまだ交流関係が保てているけれども。

ルーク本人の事は嫌いではないけれども、どうも面倒で、少しうんざりする。でも、折角学園に入れて、勉強ができるのだから、頑張ろう、そう思った。

しばらくして、昼休みが終了する。

ルークやハーレム陣はまだ帰ってきていない。それに加えて、次の授業はアフライ先生のはずである。あの横暴な担任は何をしているのだろうか、とあきれてしまう。

別に教師だろうと恋愛は自由だとは思っただけでもそれで職務怠慢するのはどうかと思う。周りの生徒達はルークのせいだとわかつてるのか、僕にちらちらと視線を向けている。

居心地が悪くて、ため息が零れる。

そんな中で、10分ほどたって、ようやくルーク達は戻ってきた。

「ルークさん、かつこいいですよね」

「ルークッ」

「勉強頑張りましょう！ ルーク」

「さあて、授業を始めるぞ」

何と言つか、教師の癖に遅れて入ってきて謝りもしない、って何なんだろう。アフライ先生は周りの生徒達が冷たい瞳を向けているのに気付いていないのだろうか。

そうして始まった授業の中で、アフライ先生は何度も何度もルークに絡んでいって、ハーレム達はそれに威嚇するような表情を浮かべて、本当に何なんだろう、って思ってしまった。

本当、周りの反応をどうして考えないんだろう。

……一応、ルークにハーレム陣達に注意するように促すか。僕がいつてもきつと反発されるだけだろうから。

魔法の授業（１）（前書き）

もつひとつの小説、一話が長いので、少し公開に時間がかかります。

魔法の授業（１）

今から行われるのは魔法の授業だ。

教師が女じゃないだけ、幸いだと僕は思う。何故だか知らないけど、教師の中にもルークを気にしている女教師はちらほら居るのだ。

「ユウ！ 何で先に行くんだよ！」

ルーク達ハーレム陣を置いて、さっさと魔法の授業が行われる演習場の中へと入れば、後ろからそんな声が響いた。

後ろを振り向けば、案の定、ハーレム陣達が僕を睨みつけていた。ルークはハーレム陣が居るせいもあって、男友達も居ないし、親友なのは多分僕だけだから、それで睨みつけてるんだろうけど、本当、面倒の一言に尽きる。

「ルークさんっ、ユウ君なんて放っておきましょうよ。私たちが居るじゃないですか」

メキシムはそんな事を言いながら、ルークの腕に絡みついている。うわ、メキシム今、僕の事なんかって、言ったよね。なんかって何て言うか、扱いのひどさに驚き通り越してあきれれるよ。

ルークはメキシムの言葉に困ったように、言葉を零す。

「俺、ユウも一緒がいい……」

そんなルークの言葉が響くと同時に、メキシム、セルフアード、アイワードの三人は僕をきつく睨みつけた。アフライ先生が居ないだけかもしれない。先生は横暴な所があるから、僕がルークと仲良いつて理由だけで単位やらないとか言い出しそうだし。

僕はふう、とため息を吐いて、ハーレム陣の態度は無視して、ルークに話しかけた。

「まあ、先にいった事は謝るけど、僕が面倒な事嫌いなもの知ってるだろ？」

面倒、の部分でちらりと、ルークに惚れてる三人を見れば、三人とも今にも噛みつきそうな何だか恐ろしい形相をして、僕を睨んで

いた。ルークの前では可愛い女の子を演じるくせに、ルークが視線を彼女達に向けていないからって、何だか色々凄まじいと思う、僕である。

「……うん、知ってる」

「なら、そういう面倒をどうにかしてほしいんだが」

「どうか、って言っても……。俺何で皆がユウにひどい態度するのか、わからないし……」

……ルーク。あからさまな恋愛感情に何でお前はとことん気付かないんだ。ハーレム陣達は好きではないが、あんなだけアピールして気付かれないのは、正直同情する。ルークが鈍感なのは、今に始まった事ではないけれども。

「はあ…、まあいいや。ルークはとことん気付かないからな……」
半ば僕は諦めている気がする。幼少の頃からルークと一緒に育ってきて、ルークと一緒に居たからルークの性格は熟知している。ルークの鈍感ぶりは変わらないし、よく考えれば昔から変わらない状況だ。

ただたんに学園でのハーレム陣がいつものハーレム達より少し面倒だというだけだ。

まあ、いい。ハーレム陣は僕を気に食わないだろうから、何かしてくるかもしれないが、その時はいつも通りに対応するでしょう。

そんな事を考えていたら、

「全員そろってるか？ 授業を始める」

魔法の担当の教師が演習場に入ってきた。その教師の名はジルアス・ルネセンド。銀髪の髪が特徴的な、30代半ばぐらいの教師である。

入学してきて、そんなに時間はたつてないが、魔法の授業の態度を見る限り、ジルアス先生は結構な実力者だと思う。

「ルークさんっ、今日私がうまく魔法使えたら頭なでくれますかあ？」

「ルーク…、がんばりましょうね」

「あなたたち、わたくしのルークに近づきすぎですわ！」

……教師が入ってきたというのにこの三人は何なんだろう。

というか、授業が始まったんだから静かにすればいいのに。本当、悪影響というか……。アイワードとルークが大貴族の子供だからって、教師たちの中にはきつく注意できない人間もいるみたいだし。

それで下手に注意しない人間が多いもんだから、ハーレム陣は調子に乗って騒いでるんだろうな、と思う。

「そこ、静かにしろ」

ジルアス先生はその点、いい教師である。ハーレム陣達に向かって容赦しないのだ。何だかハーレム陣達が注意されると、すっきりした気分になってしまふのは、きっと日頃からハーレム陣に迷惑をかけられているからだだろう。

「なっ、わたくしを誰だと思ってるのですの！」

アイワードが、そのつりあがったつり目を普段以上につり上げて、ジルアス先生を見た。

本当、偉そう。というより、威張ってるよね、本当。偉いのはアイワードじゃなくて、アイワードの両親だろ、とつつこみたいのは僕だけだろうか。

「アイワード。お前が誰だろうと関係ない。此处に居る以上お前は生徒だ。そして俺は教師だ。教師のいう事をちゃんと聞け」

「なっ……。一介の教師如きがこのわたくしに――」

「ルミ！ やめろ」

「……ルークが止めるならやめますわ」

ジルアス先生と口論しようとしてたくせに、ルークが止めればすぐやめるといふ単純ぶり。

本当にアイワードって優秀なのだろうか。ルークを見てぽーっとして、顔を赤らめている姿は正直たるんできしか思えない。

ジルアス先生はそんなアイワードを見て、ため息をついたかと思うと、言った。

「じゃあ、授業を始めるぞ。」

それぞれ魔法の練習を始めてくれ。それでわからない所は俺に聞け」

そうして、魔法の授業は始まった。

魔法の授業（2）（前書き）

お気に入り数が40行きました。もう一個のより多いです。なんか嬉しいですね。もう一個のと魔法名一緒だったりするけど、世界観は違うつもりで書いてます。

魔法の授業（２）

魔法の授業は、教科書で事前に予習し、その詠唱や術式を学び、そして授業で魔法を実践するというものである。生徒会や風紀委員以外が許可なく魔法を放つ事は禁止されている。だから生徒達は魔法の授業などの場合のみ魔法を放つ事が出来るのだ。

術式を頭の中で構築する事が出来、イメージをきちんとすることができれば、短縮詠唱や、詠唱破棄で魔法を放つ事が出来る。

僕は魔法は得意の方だから、結構短縮詠唱とかも得意である。頭の中で魔法の術式を組み立てて、それを表現する。そうして、僕は、魔法を放つ。

「《ライトアロー》」

魔法の名前だけを言う、詠唱破棄。

現れるのは、光の矢。十数本の矢。それが僕の前に出現する。

よし、うまく行った。それに僕は嬉しくなる。『魔法研究部』に入ってるのも魔法が好きだからだし、僕は魔法を使うのが大好きだ。魔法を使う際に体を駆け巡る感覚。その感覚は、僕の気持ちを高ぶらせてくれる。

学園では普段は魔法は使えないから、僕は魔法の授業が好きだ。

「ユウ！ 詠唱破棄なんて流石だな」

近くに居たルークはそう言って、僕に話しかけてきた。その瞬間周りに居たハーレム達が僕をきつく睨みつけていた。

「まあ、魔法は得意な方だから。僕魔法使うの好きだし」

「そうだよなあ。昔からユウは魔法って付くもの好きだもんな」
ルークがそう言って、笑う。

それを見てハーレム陣達は、

「ルークさん！ 見ててください」

「ルーク、私をもっと凄い魔法見せてあげる」

「ルーク、わたくしのも見てっ」

三人同時にそう言う、彼女達。

僕はそんな彼女たちを見ながら、ため息を吐いた。というより、お前ら、ルークの事好きならルークにもちゃんと魔法の練習させる暇を与えてやれよ。魔法の授業でしか魔法の練習なんて思いっきりできないのにそれを妨害して何がしたいんだ。

思わず冷やかな目をハーレム陣に向けてしまう。

それに、ルークもルークである。ハーレム陣達の申し出に、頷くあたり、何と言うか…、この幼なじみは駄目だなと思う。

「…ルーク、人の見てないで練習しろよ」

思わず、そんな言葉が口からこぼれる。

それは、ルークを思っただの言葉のつもりで言った。ルークは強くなりたいて、よく僕に言ってるし、こういう時じゃなきゃ魔法の練習できないんだから、っていうそんなつもりで。

「ユウ君！ ルークさんは私の魔法を見なきゃいけないの！」

「そうよ。ルークはあなたと違って練習しなくても主席だもの！」

「ルーク、リルドなんて放っておきましょう！ きっとルークが完璧だからねたんでるのよ」

わかった、ハーレム陣は自己中なんだな。自分の事しか考えられない、目の前の事しか見えない自己中。セルフアードの発言に関しては、確かにルークは天才って言えるかもしれないけど、天才でも努力しなきゃどうしようもない。主席だからって、授業を怠惰していいっていう理由にもならない。そして、アイワード、それは何の妄言だ。僕がルークが完璧だからねたんでるってそんな事はない。

ちなみに、リルドとは、僕の家名だ。

「んー、ユウ。俺彼女たちの魔法見るよ！」

そして、ルーク。お前が一番駄目だと思ってるぞ、僕は。他人を思いやるというか、優しくするのはいい事かもしれないが、甘すぎるのはどうかと思う。

自分の練習より、人の練習を見る。

聞けばいい事に見えるかもしれないが、それで自分のやる事をサ

ボるというのじゃ、何しにこの学園に来たんだ、という話になる。
自分の事も他人の事も、全てうまくできるとでも思ってるのだろうか。

少なくとも、僕はそうは思わない。僕は強くなりたい。あの人の
所で働きたいから。だから、自分のために努力する。

勝ち誇ったようなハーレム陣達を見て、僕はまた大きいため息を
吐いた。

そもそも、主席がどうのこうのいつてるけど、授業の成績での優
秀者と実戦での強さって違うと思うんだが…。

「ルーク、本当に自分の練習しなくていいのか？」

一応、最後に聞いておく。これでなくていいっていうなら、僕
はルークが魔法の練習をしないという事に関して干渉しない事にし
ようと思った。幾ら言っても聞かないなら言うだけ無駄である。

「いいんだ。だって皆見てほしって顔してるから」

そう言って、笑ったルークに、僕はまたあきれてしまった。

そうして、結局ハーレム陣はルークにほめてもらいたいがために
次々に魔法を披露し、ルークはそれを見てほめたり頭をなでたりす
るだけで、自分の魔法の練習は一切なかった。

…それで本当にいいのだろうかと思うが、本人がいいらしいから
もう放置を貫こうと僕は思った。

課題は自分でしましょう。

「ねえ、ルークさん。この問題の答えは？」

「ああ、フェニックスだよ」

メキシムに対して、ルークが答える。

どうやらメキシムは課題をしてきていなかったらしい。黒髪をなびかせた美少女、それがメキシムであるから、周りの男子生徒達はルークに嫉妬にも似た瞳を向けていた。

「じゃあ、この答えは？」

「ああ、x yだよ」

「ルークさんって頭いいですね！」

「そうかな？ 今度からもわからなかったら聞きに来ていいぞ、教えるから」

「わー。本当ですか？ じゃあ毎日聞きに行きますね」

…ちよつと待て。毎日聞きに行くって、わからない所は自分で調べるなり勉強するなりして理解するからこそ、勉強になるんだろーが。

答えだけのまる写しじゃ、勉強した事にならない、と僕は思うんだが。

メキシムって成績上位者だろ？ 自分で勉強せずにどうするんだ。正直隣で話を聞いている身としては、放っておくのは駄目だと思った。幼なじみのルークのせいで成績上位者の成績が落ちるなんてなったら何だか気分が悪いし。

「メキシム。課題ぐらい自分でやれば？」

「なっ、ユウ君。何でそんな事言っんですか！ 私の勝手でしょう」

「…そうかもしれないけど、今回はともかくとして毎回ルークに聞くのはどうかと思うよ？ 毎日聞きに来るっていつてるけど、答えだけ聞いても意味ないし」

僕はため息を吐いてそう言うと、ルークに向かっていう。

「ルーク、教えるならせめてメキシムが理解できるようにしっかりと説明をしる。誰かに説明する事でルークも力がつくし、メキシムも答えだけ写すなんてしてたら成績下がるから。僕幼なじみのせいで誰かの成績が下がるとか気分悪いから、ちゃんと教えなよ」

そもそも、ルークって下手に今まで全てうまくいったから、やらなくても自分は何でもできるんだってそう自惚れてる気がするし。実際にルークは特に何もしなくても何でもできて、何でも成功してる奴だけでも。

ルークって他人を強く拒めないから、メキシム達に授業中に話しかけられたら普通に話すし、何だか、学園に入ってからルークが不真面目になってる気がする。ハーレム陣達につられてやってるんだろうけれども。

第一ハーレム陣達も、自分はやらなくてもできると過信してるのかもしれないけど、本当に成績下がっていいのか、とつつこみたくなる。

「うん、じゃあ、ノア。教えるからわかんなかった所言つて」

「え、じゃあ此処がわからないです。色々わからない所あるので、ルークさんに聞いてもいいですかー？」

語尾が上がってて、甘えるような声に、メキシムは本当ルークが好きなんだな、と思う。

多分ルークと会話を交わしたいから一緒に居る時間を増やすためにそういう事言ってるんだろうけど…、メキシムの人柄を考えると、勉強せずにルークとのんびり喋ってそうないメージ。

ルークが公爵家の当主として恥のないような学力とか強さとか、そういうものを維持できるようになるべく注意しなきゃなあ…。ルークって兄が居るんだけど、ルークが公爵家継ぐ事になってるんだ。…ハーレム陣を拒絶できないからって、魔法の練習とか勉強とかおろそかになってるけど、放っておくわけにはいかないしなあ。

うーん、面倒だけど、ちよくちよく言わなきゃ本当にルークって

成績とか落ちてきそう。まだ入学したばかりだから、大丈夫だろうけど。流石にずっとおろそかにしてたら流石のルークでもどんどん駄目になっていきそうだしなあ。

： 今度一緒に勉強会でも提案してみるか。ハーレム陣も一緒にきそうだけでも。

…何故増加する、ハーレム達は(1)

朝、寮(男女混合寮だけどセキュリティ万全)から学校に行けば、何だか頭を抱えなくなる光景が目の前に存在していた。

いつものハーレム陣……担任も含めた四人が居るのはまだわかる。だけど、どうしてももう一人いるんだ？

「ねえ、ルー君。僕もこのクラスだったらよかったあ。ルー君と一緒に授業受けたかったあ」

……僕っ娘という奴ですか、これは。背は僕たちの年代よりも平均的に見て低い。ルークの腕に絡みつく姿は兄と妹にしか正直見えない。

というより、彼女は誰だ。見た事はないのだが、同じ学年か……？ そんな疑問を頭に浮かべる。

「あ、ユウ。おはよう！」

じーっと、ルークと新たなルークに惚れたであろう少女を見ていたら、ルークに声をかけられた。

僕は、ふうとため息を吐いて、ルークに近づく。

「おはよう、ルーク。この子は？ 名前と出会ったいきさつを簡潔に述べる」

「え、この人はネアラ・マーシエスト先輩！ 一個年上なんだ。今朝先輩が集団に囲まれててそいつらを追い払ったんだ、一緒に！」

…先輩だったのか。背が低いし妥協してでも同じ年だと思ってたんだが。につこりと笑うルークから視線を外して、僕はマーシエスト先輩を見た。

「マーシエスト先輩、はじめまして。僕はユウ・リルドです。こいつの幼なじみです」

先輩、だという事もあって、敬語で僕はそう言った。アフライ先生を含むハーレム四人は性格的にアレだけど。先輩がハーレム陣達と同類とは限らないし、ハーレムの一員になったからと敬遠するつ

もりはない。大事なものは見た目より中身である、と僕は思う。

「ルー君の幼なじみなのかあ。幼い頃からルー君と一緒に居たなんて羨ましいなあ。よろしくねえ、ユー君」

「はい、よろしく願います。マーシエスト先輩」

「マーシエストって長いでしょ？ マー先輩とか略していいよお？ 皆そうするから」

「じゃあ、そうします」

「ルー君とはいっから仲いいの？」

悪意のない瞳で、マー先輩はそう問いかけてくる。

…やばい、感激しそうだ。この学園入学して初めて、僕に悪意を向けないハーレム陣に会ったのだ。何だか、嬉しくなる。メキシムもセルフアードも、アイワードもアフライ先生も皆、僕を邪魔みに見てたからなあ…、と遠い目になる。

「3歳ぐらいからだぞ。ネア先輩」

マー先輩の質問に答えたのはルークだった。というか、今日出会ったばかりで先輩相手のタメ口って流石、だと思う僕である。というか、どんだけ親しくなったんだ、短い間で。

僕とルークが出会ったのは、3歳である。父親が公爵家の庭師の仕事を引き受けた関係で知り合ったのだ。…そういえばルークはその頃から、公爵家に仕えるお手伝いさんとかを虜にしていた。

僕とルークが同じ年だからって、引きあわされて、それで仲良くなった、そのまま親友となって育ったのが、僕とルークだ。

「へえ、3歳からなんだあ。かなりの付き合いなんだねえ。」

子供の頃の……」

マー先輩が何か言いかけた時、

「3歳から…！ 羨ましいですわ！ わたくしもルークの幼なじみだったらよかったのにつ。リルド、ずるいですわよ！」

アイワードが突然口をはさんできた。

…黙れ、といったくなってくる僕である。

幼なじみなのがずるいと言われても、そんな変えようのない事実

で何で僕が睨まれなきゃいけないんだ。というか、アイワード、マ
ー先輩の言葉を遮るとか年上の先輩に失礼だろ。

なんて思いながらアイワードに向かって、僕は言う。

「羨ましいと言われても困る。それにルークと幼なじみなのは結構大変だぞ？ こいつ昔からこんな感じだから嫉妬やらなんやらで色々面倒だし」

「なっ…ルークと幼なじみでありながら、そんな事を言うなんてっ。これだから、低能な男はっ！」

…低能な男って、何を言ってるんだろうか。

まあ面倒だから言い返そうという気にはならない。言い返したら余計睨んでくるようになりそうだし、本当ルークは何でこんなのと一緒に居て嫌にならないのだろう、それが不思議でならない。

「そうですよ、ユウ君！ ルークさんと一緒に居れるのに面倒だなんてっ、何てひどい事を言うんですか！」

「ルークと一緒に居て大変ってっ、ならルークから離れなさい！」

「ルークにそんな事を言うなんてっ」

ルークと僕は腐れ縁という奴だと思っ。面倒だし、大変な事はわかってるが、僕は幼なじみで親友なルークを放っておこうとは思わない。そもそも、アル様にもルークと仲良くしてくれて頼まれてるし、それにルークの方が僕を昼ご飯とかに誘ってるのに、離れなさいと言われても困る。

…というか、本当に放っておいたらルークは墮落していき駄目人間になってしまいそうな予感がしてならない。あの人のためにも、ルークを墮落させるわけにはいかない。というか、幼なじみが駄目人間になっていったら個人的に嫌だし。

「…ルークに言えば？ ルークが僕と縁切りたいと言っても言うなら離れるけど？」

ルークがそんな事を絶対に言わないのを知っているが、僕は彼女たちに向かってそう言った。

というより、僕に邪魔邪魔って態度してきて、本当、面倒。前に

メキシムがあんたみたいな平凡な人がルークの親友だなんてありえない！　とか言ってたけど、僕が平凡な顔だから気にいらないっぽい。まあ、ルークって、美形だからなあ、なんて思いながら僕はルークを見た。

ルークの顔立ちは整っている。漆黒の瞳は吸い込まれそうなほどの美しさで、その目に見つめられると全てを捧げたくなるらしい（ルークの虜であるお手伝いさん談）。銀色の光に反射して輝くその髪は神秘的な印象を人に与え、この人が欲しいと思うようになるらしい（ルークの虜である近所の少女談）。

まあ、要するにメキシム達からすればそんなルークの隣に幼なじみだからと平凡な顔立ちの僕が居るのが気に食わないようである。

「あー、皆、ユウにそんな言わないでやってくれ」

ルークは困ったように、メキシム、セルフアード、アイワード、アフライ先生の三人に言った。

そんな困ったような表情に、三人は困っているルークもいいつ、とでもいう風にぼーっとしている。マー先輩はそんな会話を聞いて僕に話しかけてきた。

「ユー君、いつもこんな感じなの？　大丈夫？」

「……大丈夫です」

僕がそう言うと、マー先輩は安心したように笑みをこぼして、次にハーレム陣達の方を向いた。

「ねえ、あなたたちはあ、ルー君の何い？」

……そうして敵意にも似た感情を瞳に浮かべ、ハーレム陣達を見るマー先輩に、やっぱりこの人ルークに恋してるんだとただ呑気に思った。

僕個人の意見としては、付き合うならメキシム、セルフアード、アイワード、アフライ先生以外にしてほしい。だって、ルークの恋人にあんた自己中連中がなったら、余計面倒な事になりそうだし。

「私は――」

メキシムが、マー先輩の言葉に口を開こうとした時、いきなり教

室の扉が勢いよく開かれた。そしてそれと同時に、

「ネアラ！」

そんな、マー先輩を呼ぶ声が、響き渡った。

…何故増加する、ハーレム達は(2)

僕は、教室のドアの方へと視線を向けた。

視線の先には、美女が居た。赤色に煌く長い髪を後ろでポニーテールに結んでいる、女性だ。この学園には制服はなく、自分が動きやすい服装を着る事になっている。ハーレム陣達はルークに見せたいのかスカートばかり履いているし、おしゃれをしてくる女子生徒は多い。だけど、その女性はそういう着飾るという事をしていなかった。

そして着飾る事もなく、その女性は美しかった。そして、その顔がどこかで見たことがある気がして、僕は頭をかしげた。

「あー、イリちゃん！」

「ネアラ。貴君はなぜ此処に居る。もうすぐホームルームが始まるというのに、後輩のクラスに入り込んで、何をしているのだ」

「えー、だってえ、ルー君かっこいいんだもん！ てゆーか、流石生徒会長、真面目だよねえ」

…マー先輩の言葉に、納得が言った。

入学式の時に生徒会長の挨拶をしていたのはこの人である。だから見たことがあったのだ。それにしてもこの人も美人だが、ルークのハーレムに加わるのだろうか？ なんて思ってしまうのは散々外見の良い女がルークに落ちていつているからだろ。

「ルー君？ ああ、貴君は主席のルーク・ヴェーセトンじゃないか。それに、次席のルミ・アイワード、四席のノア・メキシム、五席のミク・セルフアード、七席のユウ・リルド。

実力者ばかり集まっておるのだな、このクラスには。ところで、アフライ・シュンドイル。貴君はこのクラスの担任でありますよね？ 何を一生徒であるヴェーセトンにくつついておるのですか。一人の生徒を贖する事はほめられた事ではないです」

アフライ先生にはつきりと言ってくれるあたり、生徒会長さんに

好感が持てる。生徒会長さんの名前は何だったか、そんな事を考えながら頭の中を探るが、名前は思い出せない。

「なっ、私を邪魔するっていうのか！」

「…貴君は言葉を理解できないのですか？ 我は一生徒を贖するのとはどうかと助言しているだけです。周りの生徒達から見れば行きすぎたスキンシップなどはただの害にしかありません。そもそも邪魔と言いますが、我は生徒会長です。生徒達が勉強しやすい状況を作るのは当たり前ではないですか？」

我に、貴君…。うーん、ギャップがあるなあ、生徒会長さん。

しかしこうも堂々といってもらえると、今までの嫌な気分が少し晴れていく気がする。というか、我とか貴君とか言っているのに、敬語使っているのが、何だか聞いていて面白い。そしてアフライ先生の顔が歪んでいっているのを見て愉快だと思う僕はきつと性格が悪いんだと思う。

「私は！ ルークと一緒に居たいんだ！ 何故邪魔をするんだ！」

私は、周りに迷惑などかけていない！」

「…失礼、貴君は子供のようです。我儘を言っている自覚はおありですか？ 周りに迷惑をかけてないとおっしゃってますが、少なくとも我ならば自分の恋愛感情のままに一生徒を贖する担任に敬意など持てません。噂で聞いただけです、貴君は授業中にまでそういう態度をとっているとの事ですよね。それならばなおさら駄目です。学園外のプライベートならまだしも、学園内では貴君は教師であり、ヴェーセトンは生徒なのです」

「アフライをそんなに責めないでやってくれ、悪気はないんだ！」

「ルークっ、優しいな…」

ルーク、そこは黙って見てろよ！ お前どうせ自分では強く相手に言えないんだから…。いやもう、此処でアフライ先生の味方するって事は確実にルークって、自分は主席だからそんなに真面目にしないでいいみたいに勘違いしてるんだろうなあ…。自分の実力に対する自信とか、誇りはいいと僕は思っている。でも自信過剰とか自

惚れって、駄目だよなあ…、と思う。

そして、アフライ先生…。ルークが口を出したからって勝ち誇ったように生徒会長を見るのはどうかと思う。

「…ヴェーセトン、悪気がないからとしていい理由にはならない。そして責められるような事をしたのは、シュンドイル先生である」

「ルーク、ルークからアフライ先生にいいなよ。せめて授業中だけでもあの態度やめるように。実際に嫌な思いしてる人もいるだろうし、そもそもアフライ先生は授業中、ルークにばっかあてて、ルークにばっか話しかけて、それで授業進まない事だってあるじゃないか。それに何か言えばすぐに――」

「リルド！ 私の邪魔をするなら単位をやらんぞ！」

「…………私情で単位をやらないなんていう馬鹿な事言いだすんだし」

生徒会長さんの言葉に続いて、僕もアフライ先生に言った。だって、普段単位あげない、単位あげない言うから強く反発できなかったし。でも、生徒会長さんが居るなら、言っても大丈夫かな、と思った。それに単位やらないって脅して大人しくしてるなんて正直僕らしくない、と思うし。

「貴君、失礼ですが馬鹿なのですか？」

…生徒会長さんの言葉が直球すぎて、僕は思わず噴き出すかと思っ

…何故増加する、ハーレム達は(3)

「な…、私が馬鹿だと！ 貴様、私を怒らせたいのか」

うわ、何か雑魚キヤラっぽい台詞。冷静さにかけていて、何て言うか、アフライ先生って本当に大人なのだろうか、と疑問に思う。生徒会長さんは、アフライ先生に冷めた瞳を浮かべていた。

まあ、当たり前だよな。周りの生徒達だって、アフライ先生の外見で好意的な目向けてる人も少しは居るけど、大抵は呆れている。ルークに出会うまでのアフライ先生はいい教師だったみたいだけど…。恋愛は人を変えるっていうしね。ルークのせいで変わったんだろ。

恋愛に夢中になりすぎて、周りが見えなくなってる姿は何だか、本当馬鹿みたいだ。というか、怒らせたいのかって、何様だよって話だよな。

「……理解しました。貴君には理解力がないのですね？」

リルド、少し話を聞きたいのだ、すまないが、一時間目をサボってもらっても構わないか？」

「……いいですよ」

「なつ、ユウを何処に連れていくんだよ！ まさかユウにも何か言う気じゃ……」

きつとアフライ先生と話しても埒が明かないんだと思ったんだろうな、なんて思いながら頷いて、生徒会長さんとサボろうとしていたら、いきなりルークがわけのわからない事を言い出して、僕の腕をつかんだ。

…強くつかまれて正直腕が痛い。そしてお前は何処の妄想野郎だ、とでも言ってやりたくなってくる。頭はいいはずなのに、ルークって馬鹿だ。悪気がないのはわかってるけど、そんな風に生徒会長さんを睨んで何をしてるんだ。

「…ヴェーセトン。我の名にかけてリルドに危害は加えない。

我はただリルドと話しただけである。そして、リルドが痛そうにしているじゃないか。その手を離すのが先だと我は思う」

「あ、ごめん、ユウ！」

生徒会長さんの言葉に、ルークはよくやく腕から手を離してくれた。

「ルーク。大人しく待つてよ。僕は生徒会長さんと話して来るから。そして生徒会長さんは僕に危害加える気ないの、見ててわかるし。真面目に授業受けなよ。お前最近あんまり授業真面目に受けてないだろ？」

というか、ハーレム陣達の影響で授業サボっていちやついてる事もあるし。僕は真面目に授業受けてんのに、終わってからイチヤイチヤしながら帰ってくるという始末だからなあ…。

「……いや、でも」

「いいから、真面目に受けな。お前が公爵家継がなきゃいけないんだから、折角学園に入らせてもらったんだし、精一杯やりなよ。アル様にがっかりされたくないだろ？」

「…じゃあ、授業受ける」

よし、とりあえずもつともらしい事を言つて、ルークに真面目に授業を受けさせる、っていう事は実行できそうだ。これで、生徒会長さんとゆっくり喋れるはず。

何だかルークが悲しそうな顔してるけど、そんなの放置だ。そんなルークの表情にマ―先輩以外のハーレム陣がルークの望みを何で叶えないのよ！ みたいに睨んで来てるが、無視だ。

「生徒会長さん、行きましょう」

「うむ。ネアラはどうする？」

「あ、私は授業に行くのお」

というわけで、僕と生徒会長さんとアフライ先生は教室を後にした。

生徒会長さんとサボリです。

「さて、リルドよ。そこに座れ」

僕と生徒会長さんが居るのは、生徒会室。当たり前だが、授業中という事もあって他に人は居ない。

生徒会室は広がった。沢山の資料がおかれた、部屋。確か生徒会は生徒会長、生徒会副会長、生徒会書記、生徒会会計、生徒会補佐2名の、計6名で形成されているはずだ。

「はい」

僕は生徒会長さんの言葉に頷いて、赤いソファへと腰掛けた。

そして、話を切り出す。

「それでお話とは？」

「……ヴェーセトンの事だが、いつもあんな感じなのか」

「あんな感じとは？　そして生徒会長さん、できればお名前を覚えていただけないでしょうか？」

「……貴君は我の名前を知らないのか？」

「正確に言えば忘れました。前にどつかで聞いたと思うんですが、そう口にすれば、生徒会長さんは面白そうに笑った。

「そうか。我はイリス・セトモレアだ。好きに呼ぶといい」

「なら、セトモレア先輩……長いからセト先輩でいいですか？」

僕の言葉に、セト先輩は笑顔で頷いてくれた。

美女の笑みって、なんか、本当綺麗だなあ、なんてただそんな感想を心に浮かべてしまう。

「それで、リルド。あの、ヴェーセトンを囲っている女たちは貴君を睨んでおったが……」

セト先輩は真剣な表情で問いかけた。いつもの事だと、入学してから僕は結構なれてきたつもりだが、やっぱり周りから見るとあのハーレム達ってきつと何か変なんだろうなと思う。

「いつもの事です。ね。ルークって昔からハーレム作るんですよ、

本当びつくりするぐらい女が寄ってきますね。まあこの学園でできたルークに惚れた女は、マー先輩も含めて今のところ五人ですが、マー先輩以外の4人は正直自己中ですから、少し面倒です」

「……貴君は随分はつきり言うな。ところでマー先輩とはネアラの事か？」

「そうです。というか正直ルークと幼なじみじゃなきゃ関わりたくないですね。ああいう面倒なのは」

「というか、本当に何でルークってハーレム作ってんだろう、毎回確かにルークは美形だし、勉強もできるし、魔法も得意だけど、それだけとしか僕には思えない。ルークは優しくて甘い人間だから、もてるのかもしれないけど。」

あんな風に美少女を次々と落としていくほどの魅力がルークにあるかといえば、正直な感想を言うと謎だ。

「貴君とヴェーセトンは幼なじみなのか？」

「そうです。10年の付き合いですね。だからルークがハーレムを作るのにはなれてるんですが、今回のハーレムは本当いつも以上に面倒です。特にアフライ先生ときたらすぐに単位をやらない、単位をやらないって、呆れて仕方ないですね」

「…それは大変だな。一応こちらから教師達にシュンドイル先生について話しておく。それでよくなるかは分からないが」

そんな発言に、セト先輩はいい人だなあ、とただ思う。

一人の生徒のために行動してくれる、生徒会長。理想的な生徒会長だ。僕は一つ確認したい事があって、セト先輩に問いかけた。

「ありがとうございます。ところでセト先輩はルークに惚れたりしないんですか？」

「いや、我はヴェーセトンに惚れたりはしないが、何故そのような事を聞く？」

「…今まで美少女とか美女がありえないぐらいの比率でルークに惚れていったので、セト先輩もそうなってしまうってしたらどうしようと思ってしましまして。セト先輩美人だし」

「それは、今まで苦労してきたのだな…。何かあったら相談に來い。生徒会室か3・5のクラスに基本的にいるのでな」

……今まで美少女とか美女がルークに次々に惚れていつて面倒だったから、知り合いにそういう人達が出来るとうんざりしてたけど、セト先輩は心配ないようだ。

良かった、と安心してしまう。おそらくこれからハーレム陣は増え続けるだろうが、なるべく増えないでほしいのだ、僕は。

だって、結局厄介事は結構こっちに回ってくるようになってるのだ。毎回、色々巻き込まれるこっちの身にもなってほしいものである。ルークはハーレムが何人増えようと皆で仲良くできてうれしいぐらいしか思っていないからな…。

そして時たまルークの貞操を狙う馬鹿までいるからなあ…。なんか既成事実作ろうとして薬盛ったり、正直何考えてるのか理解不能だった。十歳をすぎたばかりの餓鬼に薬盛って既成事実作ろうとするに十七歳のお手伝いの女とか怖すぎだろ！ 僕がどうにか気付いて止めたからよかったものの…、その後が大変だった。

その女が泣きわめいて嘘の証言しだして、馬鹿ルークはそれを信じてそいつを庇って…、お前は貞操の危機を理解してないのか、とルークに長い説教をかましてどうにかその女は追放したけど。その頃からルークの兄は公爵家を継ぐ気はなくて、ルークも納得して時期当主だったんだが、公爵夫人を狙って既成事実作りたい輩も何人かいたという。というか、餓鬼相手に盛るな、っていう話だよな。

結局一時間目が終わるまで、僕はセト先輩と雑談を交わして過ごした。

どうやら、大会があるようです。

『第××回、中等部学園内コロシウム』

概要：学園内最強は誰だ！？　これに出て活躍できれば、気になるあの子の目にも止まる！？　本選まで出場すれば、軍やギルドの方々の目にも止まる！？　一年生には不利かもしれない、しかし君らには可能性がある！　何でもありのコロシウム！　出場希望者は用紙を書いて提出するように。なお、会場には治癒&修復魔法がかけられる予定です。まずは予選を通過し、本選へ進め！

……どうやら、学園内最強を決める大会があるらしい。

僕は教室の掲示板に張られた紙を見て、それを知る。

本選で、軍とかギルドの人も来るっていう事は、あの人も来るかもしれない。それに、活躍すればあの人の耳にも入るかもしれない。それなら、僕は出ようかなと思う。

面倒な事は大嫌いだけど、僕は強くなりたい。自分がこの学園でどれだけ強いかわかりたい。

「なあ、ユウ。あれでるか？」

「ん？　もちろん出るけど。ルークは？」

「ユウが出るなら俺も出ようかなあ……」

ルークが大会に出るか……。それもいいかもしれない。ルークとは模擬戦を昔からしてたけど、最近はあるまりしてなかったから。それに、強い人と戦うって事はそれだけ経験になる。

経験を積むっていうのは大事な事だと、僕は思ってる。だから大会は本当に楽しみで仕方がない。どんな戦い方をしようか、何でもありってことは戦うための道具も持っていていいっばい……。長剣より弓の方が得意だけど、相手が長剣とか槍だったら弓じゃ戦いにくいかなあ。となると、やっぱり……。敵の武器と力量によって色

々戦い方を変えるべき。

僕が一番得意なのは、魔法だし…、そっち系で責めるべき。下準備をきちんとしておかなきゃ。開催は一カ月後……、勝つための魔法具とかも色々考えなきゃ…。

「ルークさん、出るんですか！？　ルークさんなら絶対いい所までいけますよ」

「そうよ、ルークならきつと圧勝よ」

「ルークが強いのは当たり前ですわ！　だってわたくしのルークですもの！」

「ルークなら今のままでも十分強い、私が認めよう！」

そうやって、騒ぎたてるハーレム陣の中の、アフライ先生とアイワードは僕を見ていった。

「リルド！　お前がコロシムなんかに出てもどうせ負けるんだぞ。なんたつて私のルークが出てるんだ！」

「そうですね！　あなたごときがルークに勝てるはずなどありませんわ！」

…ウザいなあ、本当。

そもそも担任もアイワードもルークルークってどんだけだよ、っを感じ。寧ろルークを神と崇めた宗教っぽくって見てて引く。ルークに惚れてる人達って、本当、ルークルークって、うっさいからなあ。

というか、なんか、ちょっとむかついてきた。

…ルーク対策を念入りに考えておこう。ルークにだろうと、負けたくないし。

よし、打倒ルークで頑張ろう。予選通れるかさえ、わからないけど。とりあえずは、それが目標だ。

準備をしましょう。

「えーっと、此処はこうして……」

僕は今、寮の自室に居る。部活はあんまりいけなないかもしれないと部長に既に報告している。コロシアムのための準備するので、といえは納得してくれた。

ルークは僕と一緒に準備するって言い張ってたけど、仮にも敵になるルークに手の内を見せる気には僕は到底なれなかった。

まあ、ルークが僕と一緒に準備する発言して、ハーレム陣達に滅茶苦茶睨まれたけど。結局ルークは僕に断られると、ハーレム陣達と遊びに出掛けてしまった。

まったくもって、呆れる。ルークはただたんに幼なじみの僕と準備と一緒にしたかっただけなのだろう。決してコロシアムのために、勝つために、という真剣さはない。自分が負けるはずないとも思ってるのか、それとも負けてもいいと思ってるのか……。

そんな事を考えながらも、僕は術式を靴に組み込んでいく。魔法を発動する際に重要なのは、術式を理解する事。魔法、というモノを理解する。それが出来なければ魔法は発動されない。

そして僕は、物に術式を組み込む作業をしていた。これは簡単な事ではないけれど、僕は幸いにも魔法に関する事は得意な方だ。その腕を見込まれて魔法具職人の知り合いに術式の組み込み方を仕込まれた。

本当は物に術式を組み込むという簡単な魔法具じゃなくて、一から作る魔法具を作りたいのだが、30日という短い期間じゃ本格的な魔法具なんて出来やしない。簡単な魔法具でもいいから実用性がある、戦いやすい物を取りあえず、組み立てたいのだ。

ルークはあんなんでも、天才だ。幼いころから神童と呼ばれていた男だ。現にルークは僕よりも強い魔法を放つ事が出来る。剣さばきもルークの方が上だ。

とはいっても、ルークの場合、それだけとも言えるけれども。

勝てるかは正直微妙。念入りに準備をしたとしても、ルークは今
は怠惰してるけど、今までは結構真面目に剣術や魔法に取り組んで
いたのは事実だ。

できれば勝ちたい、とは思ってる。もし僕がルークに勝って、う
まく立ちまわったなら、ルークはきっと強さを求めるようになるだ
ろう、と僕は思ってる。まあ、僕が勝てなくても、他の上級生達が
ルークの強さの自信をへし折ってくれるかもしれないけれど。実際、
僕とルークがどのくらいの強さの位置に居るかわからないから、こ
のコロナムで確認しなければと思う。

そんな事を考えながら黙々と作業に没頭していれば、ピコーンッ、
ピコーンッと突然奇怪な音になる。僕は音の原因を知っているので、
それに近づく。

そのの上にかかっている布を上からはずせば、鏡がそこにあつた。
そして、鏡の淵は赤く点滅している。これは、魔法具、『通信鏡』。
遠く離れた相手でも、鏡の術式ナンバーを覚えていけば、互いに
通信する事が出来るというもの。そして僕は、鏡の上の部分を軽く
押して、通信に出た。

『よう、ユウ久しぶりだな！』

そして、鏡に映ったのは、黒髪、黒目の男——。僕はその人
の声と顔を見た瞬間歓喜に声をあげた。

「アース！」

『元気そうだな』

「うん。アースも元気そうだね。で、どうしたんだ？」

『週末暇か？』

「別に開いてるけど、僕に用事？ それともルークに用事？」

僕と今通信を交わしている人物——、アースはルークの実の兄
だ。六歳上で僕の幼なじみでもある。

公爵家当主の座はさっさとルークに受け渡して自由に生きている
人である。

『両方だ。パティラ山に登ろうと思ってな、ユウ達も行きたいなら連れていこうと思って』

アースは昔から魔物が出る危険な場所に探検に行くのが好きだった。ルークは公爵家時期当主として勉強とか忙しくてたまにしかついてこなかったけど、僕は結構アースの行く探検についていていた。

「もちろん、行く。ルークには僕から聞いておくよ。ところで、アース。アースは学園でのコロシウム見に来る？」

『んー、微妙だな。いけるかはわからないが、ユウは出るのか？』
「僕もルークも出るよ。勝てるかは分かんないけど、目標打倒ルーク」

『そうか。俺はいけるかわかんねえけど、頑張れよ』

「うん、頑張る。とりあえずルークに週末の事聞いておくよ。返事聞き次第、連絡する」

『ああ』

そうして、会話を交わして、通信を切った。

……アースに久しぶりに会えるのは楽しみだ。それに、山とかに登ったり、森に入ったり色々するの僕結構好きだし。丁度良い気分転換になるかもしれない。ルークにも聞かなければ、一緒に来るかどうか。

ルークを誘いました。

「えー、ルークさんを山になんて連れていくって…。ルークさんはそんな野蛮な事しなくても強いから大丈夫なの！　ねえ。ルークさん、山何かに行かないで、私と買い物しましょ」

教室でルークにどうするか聞きにいったら、メキシムはそう言った。

メキシム…。野蛮って、どっちにしろコロシム終わってから魔物退治の依頼とかを学園内のチームでやったりするわけだし、なれておいて損はないと思うんだけど…。

「そうよ。ルーク、私山に何か行きたくない。一緒に過ごしましょ」

…セルフアード。何でルークが行くなら行く事前提の台詞なんだ。いや、そりゃあルークが行くならついていくだろうとは予想できたけど、山になんか行きたくないって…。

「そうですね！　わたくしのルークはそんなところ行く必要ないのですわ！　そもそも山に何かいってわたくしのルークが怪我をしたらどうするつもりなのですわ！」

いやいや、何事も経験だよね？　ルークは次期公爵だし、危険な目には結構あうだろうし、魔物ぐらい倒せなきゃやってられないと思うんだけど。そもそも、アイワード、何でルークがアイワードの物みたいに決定した言い方してんの？　アイワードの頭の中じゃ、ルークは既にアイワードの物なのか…。ひどい妄想だよね。

「そうだ！　私のルークが怪我をしたらどう責任をとるつもりだ！」

責任も何もないだろう、アフライ先生…。そもそもルークがついてくるっていつて怪我をしたなら自己責任だし。

「ユー君、魔物退治いくのお？　頑張つてねえ」

マー先輩…。やっぱりまともなのマー先輩だけだよね。このハ-

レムの中で。そもそも何で他のハーレム達は、自分たちが週末にルークと過ごす事を決定した言い方してるんだろ。ルーク何も発言してないんだが…。

「で、ルーク。どうすんの？ あんまり人数いるとアースも嫌がるし、来るならルーク単品で来てもらった方が楽なんだけど」

「確かに…、兄上沢山人がいるの嫌がるからな。今回みたいに出かける場合、人が多いと動きにくいし」

ルークの言葉に僕は頷いた。

探検とかそういう事を魔物がいる場所でする場合、余計な人が多いと動きにくいのだ。昔森とかに行く際に、ルークが何人も女の子を侍らせてきて、そのせいでアースはうんざりしていた。その事から、ルークはこうやって出かけるときにあんまり人を連れてこなくなつた。

今までのハーレム陣達はルークが拒否すれば頷いてくれたけど、このハーレム達はどうだろうかって不安はあるが、こういう場合ルークは一応きちんと断ってくれる。

「…ルークさんのお兄様も一緒なの！？」

「それなら、行くわ！ ルークのお兄様なら美形なのかしら？」

「わたくしももちろん行きますわ！ ルークのお兄様にご挨拶しなければっ」

「ルークの兄…、山にじゃなくて此处に呼んでぜひとも雑談したいものだ。山から変更しろ、リルド！」

わー、いきなり態度変えたよ。

というか、ルークの兄だからってそんなにアースに近づきたいかね…。頭の中でアースからどうにか口説き落としてルークを落とそうとでも段どりをたててるのかもしれない。

「アフライ先生変更しろってのは無理です。メキシム達も、アース…ルークの兄は沢山ついてこられても迷惑だと思つから、ルークが来るとしてもついてくんのはやめてくんない？」

ため息交じりにそう言えば、思いつきり睨まれた。

そうはいつでも、山とかに行くのについてこられると迷惑。そもそも僕、ルーク、アースは幼なじみだから互いに実力知ってるし探検とか行きなれてるからいいけど、担任はともかくとしてメキシム達は魔物と対峙した事なんてないだろうし。

「なっ… 私たちはルークさんと一緒に居たいんです！」

「…ルーク、お前結局どうすんの？ 来るならしつかり、そいつら諦めさせるよ」

「んー… 行きたい、けど」

「行きたいなら、一応アースに連絡しとくから、そいつらどうにかしろよ？」

僕はそれだけ言うと、自分の席について、読書を開始した。

隣から、ルークとハーレム陣達の言い争いみたいなのが聞こえてくるが、僕はホームルームの時間まで黙々と本を読み続けた。ちらっと、言い争いに視線を向けると、ルーク達が言い争う傍らでマール先輩だけが困ったような表情を浮かべていた。

山に登ります(1)

「よう、久しぶりだな。ユウ、ルーク」

待ち合わせ場所に僕とルークが行くと、アースは右手を挙げて、そう声をかけてきた。

アースは僕たちより6歳も年上なだけあって、僕たちはアースを見上げる形になる。

「久しぶり、アース！」

「…兄上、久しぶり」

「お？ ルークは何で元気ねえんだ？」

「ルークのハーレム陣達が離してくれなかったみたいだよ」

そうである、結局ルークはハーレム陣を巻くのに相当苦労したようであった。ルークは行くと決めてから数日ハーレム陣達についてこないように何度も言ったのだが、あいつら驚くほどにしつこかった。

昨日も寮長に注意されるまでルークの部屋にハーレム陣達(マー先輩も含む)は居たらしい。僕は今日の準備とかもあつたから、マー先輩にルークが既成事実作られないように見ててくれないか頼んでおいた。

マー先輩はルークに惚れてるからそれをきちんとやってくれたけど、あとで、マー先輩にお礼として何か持っていこうと思った。

「あ…、相変わらずもててんのか、こいつ」

「そーだね。びっくりするほどのもてっぷり。僕が把握してるだけで、入学して20日ちよっとしかたつてないのに五人落としてる」

「え、何言つてんだ？ 俺はもてないぞ？」

ルーク…。鈍感にもほどがあるだろう、とつつこみたくなるのは僕だけじゃないと思うぞ。

つか、あんだけひつつかれておきながら気付かないってどうなってるだろう、ルークの頭の中は。

「…本当、相変わらずだな。いらん女に引つかからないようにもうちよつとしっかりしてくれと兄として安心するんだが」

「…ルークは一回痛い目みないと無理だと思う」

「それは言えてる…」

「ん？ 何話してんだ？」

僕とアースの会話に、ルークは不思議そうな表情をしていた。

ルークは本当に痛い目みないとどうしようもないか、と僕はため息を吐いて、とりあえずパティア山に僕たちは向かう事となった。

移動手段は、馬である。移動手段として徒歩や馬、馬車などあるが、馬を借りるだけで1クエーワ銅貨5枚が必要なのだ。馬車になると、1クエーワ銀貨5枚である。幾ら公爵家がお金を持っているといつても、あんまり無駄遣いはしたくないものである。

馬とか馬車を貸し借りしてくれる業者が存在しており、借りれるようになっているのだ。それで馬を紛失した場合、その馬そのものの値段（馬によって値段は違う）が、相場としては銀貨5枚を罰金として払わなければいけない。馬車の場合は銀貨15枚である。なお、貸し出す馬や馬車には魔法具がつけられており、居場所がわかるようになっている。もし、借りた人間が逃げ出した場合は、業者間の間で指名手配状態となり、罰金を払わない限り馬などを借りられなくなるのだ。

ちなみに、街から街へと移動し、元の街に帰らない場合は、業者が配布する特別なカードさえあれば、行きついた街の業者に借りた馬を預ける事が出来る。基本的に業者はそこらじゅうに存在していて、業者協会なるもので取り仕切られているのだ。

業者の所にいって、馬を借りる。僕は平民だけど、ルークと一緒に馬術を習ってたから馬の乗り方は一通りできる。ギルドという、他の大陸は知らないが、この大陸に存在する何でも屋の機関である程度稼いでいる人は移動手段として馬を買って、移動する人も多い。だが、馬を買った場合、餌代などもかかるため、ギルドのメンバー達や、冒険者といった類の人は業者を利用することが多い。

僕たちはこの学園のある街——スレリアスに戻ってくる予定なので、カードは配布してもらっていない。また、カードをもらっていないのに違う場所に預ける行為をしたい場合にはまた預け賃という銀貨2枚を払わなければならないらしい。ついでに言うと、馬を借りる際には会員カードを作らなければいけない（これは銀貨3枚）。

僕らは昔会員登録を済ませていたので、とりあえずクエーワ分……要するに銅貨25枚。

基本的に僕は趣味以外にはお金を使わないし、作った魔法具とかを売ったお金やお父さんからの仕送りとかあるから平民でも少しは財布に余裕があると思う。

アースに関しては今は軍に所属してるし、ルークはアル様から仕送り結構もらってるんだけどね。

僕たちは馬に乗って、パティラ山を目指した。

山に登ります(1)(後書き)

金貨＝銀貨20枚

銀貨＝銅貨50枚

お金は、金貨、銀貨、銅貨の三種類。

銅貨5枚あれば飲食店で一食分の食べ物を食べれるぐらいの値段。食事だけの計算だと1日銅貨15枚あれば足りる。で、1ヶ月50日なので、1ヶ月銅貨750枚。要するに食事だけなら銀貨15枚あれば生きていける。

値段の相場については思いつきで書いてるので、不自然ならどこかに書いてください。直します。

馬の相場が正直わからないという…。

1クエーワ＝こっちでいう二時間。

1日は16クエーワ。要するに1日32時間。

1年は450日。

月は大きくわけて、9か月。要するに1ヶ月＝50日。それぞれ、1の月、2の月などと数える。

1週間は8日。1日目＝エイ。2日目＝ルー。3日目＝サウラ。4日目＝リアーラ。5日目＝ホルン。6日目＝シイラ。7日目＝ヨー。8日目＝ワルモ。

適当に考えてみたけど、異世界だから数え方違うのもありかなと思って、考えてみました。ちなみに7日目と8日目は基本的に仕事や学校は休みです。

ユウはあの人あの人だったのは、アースの事です。

こんなに早くアース出す気なかったのに、書いてたら何かアース登場しました。

山に登ります(2)(前書き)

1ク
1ワ
2分

山に登ります(2)

30クーワほど馬で飛ばして、パティラ山のふもとに到着する。

正直山に登るのに馬は邪魔なので、木に繋いで、馬達が魔物に危害が加えられないように、魔法陣を地面に描いて結界を展開させた。

「さて、行くか」

アースが意気込んで、笑った。

アースの武器は長剣である。銀色に輝くそれは、アースが軍での仕事中でも使っているものだ。

僕は弓を装備している。とはいっても接近戦になった時困るから、ロープの中に短剣なども仕込んであるけれども。いざって時は魔法具『亜空間』から取り出せばいいだろうし。

ちなみにルークも長剣を腰に下げている。それは魔法具の一種だったりする。というより昔ルークに惚れてた人の父親が魔法具職人でその関係でもらったものだ。今はその子は他に恋人作っているけれども。基本的に『通信鏡』のような魔法具でさえ高級だ。武器に術式を組み込む作業は一から武器を作らなければならない。というより、魔法具で後から術式を組み込めるのは、布や皮などにだけであって、銅や鉄のものには鍛冶をしながら術式を編み込む作業をしなければならないのだ。

鍛冶師であり、魔法具職人でなければなせないものである。そんなわけで、ルークが持っているような武器であり魔法具であるモノは高価だ。そんなものをタダでくれるとあちらが言うものだから、ルークが必死で金は払いますと言ってた記憶がある。

流石に、金貨40枚〜100枚するような物をタダで受け取る気はしなかったらしい。その父親は親ばかだったから娘の頼みを断れなかったようだが、普通7歳の子供に魔法具である長剣を渡したりしねえだろとつつこみたい。

山を登る。僕は魔法具である、身体能力を強化する靴を今履いて

いる。これは僕が一から手掛けたものである。二年近く前に作った魔法具で、初めて作った魔法具だったから、そりゃあもう時間がかかった。

体力回復、魔力回復の薬——魔法薬学の専門家が作ったものを僕は仕入れているので、バックには行っている。ルークと違って魔力量が異常でもないし、体力もルークみたいにないので、僕はこういう準備をしてきた。

「ユウ！ 山とか登るの久しぶりだなあ。なんか楽しい！」

ルークは無邪気に笑った。

「それは良かったな」

「それにユウと最近あんまりゆっくり話せてなかったし、何か楽しい」

「そうか。それならアイワード達をどうにかすればもつとゆっくり話せると思うんだが」

「えー、何で？ ルミ達いい子なんだよ？」

「…それはお前に猫かぶってるからだろ」

猫かぶりのハーレム陣達を思い浮かべてみる。あいつら、ルークが居る前で僕に対するけなし発言たまにするが、ルークが他の事をやってて話聞いてない時に色々言ってくる時もあるからな。というかルークは基本的に話しこんでたり、何かに夢中になってると周りの声とかあんまり聞かないから。

「猫かぶってる？ 皆俺にお弁当作ってくれたり、教科書忘れたら見せてくれたり優しい人なの？」

「それはルークにだけだろ？ あいつら僕の事かなり睨んでるし、色々言ってるけど」

「皆もユウも優しいから、きっと仲良くできると思うんだけどなあ。何で皆ユウにあんな態度するんだろ？」

心底不思議そうに首をかしげるルークを見て、僕は大きく息を吐いた。

そつだ、一番厄介なのは、本気でルークが皆が仲良くなれると思

つて、猫かぶりのハーレム達を心から優しいと思いこんでる所である。悪気はないのはわかるが、もう少しどうかしなきゃこいつ色々駄目だよなあ……と僕は思う。

そもそもルークは権力者だ。この貴族社会でトップクラスの権力をこの国で持つ事になるのだ。この国——アルティアト王国は王族、公爵家、伯爵家、侯爵家、男爵。という、王族と貴族が居る。ヴェーセント家は公爵家の中でもトップクラスに位置する。そして、発言権も大きい。

そんな所の跡継ぎが、これだけすぐころつとだまされるんじゃ、本当に駄目だ、と僕は思う。どうにかルークにもっと自分の地位を自覚してもらわなければ……

「ユウ、ルーク、来たぞ」

アースに言われて、前を見れば、魔物がいた。

四足で地面に降り立つ、赤い毛皮の狼。レッドウルフと呼ばれる魔物が、五体そこにいた。

大きさは、50センチぐらい。大人のレッドウルフだと60センチ……メートルあるらしい。

「……よし、やるか」

ルークはそう言つて、長剣を抜いた。ルークのその長剣の名は『イーサ』（ルーク命名）。大きさからは信じられないほどの軽さの長剣であり、それは、魔力を込めれば炎を纏う。

アースの長剣は魔法具ではないが、かの有名な鍛冶師——トワイデント・イザラという老人に売ってもらったものらしい。ちなみにこちらルークのと同じ高級品だ。

二人が長剣をふるって、一匹ずつ蹴散らす。

僕は、意識を集中させる。そして、”ある存在”を探す。

「……見つけた」

僕はぽつりとつぶやき、口元を緩めた。

そうして、向かってくる三匹のレッドウルフに向かって口を開く。

「精霊よ、僕の望みに応えて！」

祈る、祈る——見つけたその存在に向かって、願う。

そうすれば、巻き起こる風。その風はレッドウルフに襲いかかり、滅していく。

僕が今行使したのは、精霊魔法と呼ばれるモノである。一般の、自身の体内にある魔力を使って魔法を起こすのとは違って、精霊に呼び掛けて力を借りる、そんな魔法だ。

精霊魔法を使うには、精霊を感じなければいけない。感じられなければ精霊は力を貸してくれない。精霊を感じられるモノを《精霊の愛し子》という。一応僕もそれに分類されるんだけど、僕は感じるだけしかできないけど、そのチカラが強い人は精霊を見て、精霊と会話する事が出来るらしい。

ちなみにルークは一般の魔法は滅茶苦茶強いんだけど、精霊を感じる事はできない。アースもルークと同様だ。

まあ僕の場合精霊の方から僕と話したいとか思ってくれればギリギリ見えるレベルなんだよね。精霊と契約すると、精霊魔法の力が結構一気に上がるらしい。だから契約できればもう少し精霊魔法が活用しやすくなると思う。

学園では精霊魔法は知識として習うだけで実戦は習わない。《精霊の愛し子》って結構数が少ないらしい。感じる事が出来ても精霊が応えてくれない場合もある。まあコロシムでは何でも有りだから精霊魔法も使っていいだろうけど…、学園の近くや学園内に力を貸してくれる精霊が居るかどうかが問題なんだよね。

精霊魔法の場合、自身の魔力は使わなくていいから楽だけど、僕の場合感じても力貸してくれなかったり、力貸してくれたりバラバラだから一般の魔法を使う方が多い。

今回は精霊が力貸してくればいいなあ、っていう気分で魔法使ったんだけど、うまくいってよかった。

レッドウルフを倒した僕らは次々と山の奥へと進んでいった。

山に登ります(3)(前書き)

いつの間にかお気に入りが1000を超えました。応援ありがとうございます。

山に登ります(3)

「ユウっ！」

ルークの切羽詰まった声が聞こえる。

あー、ミスった。そう思った瞬間僕は転がり落ちていた。

何処をかって……、山の中心部分の崖。魔物を倒しながら進んでいたら、ドジった。どうにか速度を落とそうと足を引っ掛けるが、どうにもならない。ふう、と僕はため息を吐いて、近くに風の精霊が居る事を感じる。

「精霊よ！　僕をゆっくりおろして」

もうすぐ地面に到着する。このまま降りたら重傷物だ。空を飛ぶ魔法もあるのだが、生憎それは難しくてユウはあんまり成功しない。精霊に呼び掛けたのも一か八かだったが、どうやら成功したようである。

体がふわりと浮いて、地面へと着地する。

上を見上げて、僕は思う。大分落ちてきてしまったらしい。

此処はどの辺だろう、そんな事を思いながら周りを見渡す。

そうして目に映るのは、湖だった。青く透き通るような水が、光に反射してキラキラ光っている。湖の上には蓮が浮いていた。

湖をのぞきこめば、僕の顔が映る。覗き込んでいれば……、湖の奥に、何かがうごめいているのを確認した。

湖に顔をつけて、のぞいてみる。

そうすれば……、魚の黒い目と目があった。

僕は慌てて、水から顔を離して、だーっと、少し離れた位置まで移動する。

……本で見た事がある。あれは、バハムートではないか。鱗の生えた黄色い表面。大きさは、2メートルぐらいだろうか。あれでも

確か子供のはず。親のバハムートは5〜10メートルあるらしい。確か湖とかで卵を産んで、親は海に住んでいるんだったか（海でも湖でも生息可能）。バハムートは一見すると普通の魚のように見えるが、魚のくせに、角が生えている。ドラゴンが持つような鋭い角だ。

下手したらばくつと食べられてしまうじゃないか。子供は群れるとも言うし、一匹だけじゃなかったら、相当怖い。バハムートは空を飛んでいる鳥も水面から顔を出して飛びあがり食べてしまう。そして口からは火のブレスが吐けるらしい。一応魚類のくせに。水に住んでながら火を吐くって何なんだろうね？

というか、上に行きたいけど、上だけの魔法や精霊魔法僕使えないんだよね。ああ、バハムートとか牙がかなり鋭いはずだから、マジ口ん中に入れられたら死ぬ。骨普通に砕くらしいから。

バハムートって、卵の生み場所が毎回違うから予想できないんだけど、まさかパティラ山の湖に居るとは…。

どうにか、アースやルークに合流しなきゃ。いやもう、一人でバハムートが何匹生息するかわからない湖の近くに居るって恐ろしすぎる。もしかしたら親のデカイバハムートまで来るかもしれないし…。そうになったら恐ろしい。

登る道がないか、どうにか探すために視線を動かす。

……上に登れそうな坂を見つけたが、湖の隣通らないと通れない。困った。どうしようか、そろーりに行けば気付かれないだろうか。気付かれたらブレス吐かれる可能性と、口を開けられる可能性がある。どっちもぜひと遠慮したい。

バハムートって気配に敏感らしいから、姿を消す魔法（難しいから中途半端にしか発動できない、ルークはできるけど）をやっても悟られる事間違いないだ。

僕は勇気を出して、湖の近くを通る事にした。そろーりと音を立てないように進む。

そうすれば、バシヤツと音になった。湖の方を見れば、口を大き

く開けた、バハムートが一匹。

「——っ!？」

思わず悲鳴を上げなくなる。やばい、バハムートの喉の奥が赤い。多分プレス来る!

それを悟って、とつさに魔法を唱える。

「我が前に光の導きを。

守りの盾を我前に!

《ホワイトシールド》」

短縮詠唱を唱えた瞬間、プレスがこちらに襲いかかってきた。

流石に防ぎきれはしなくて、炎が少し体にまとう。僕は慌てて、水魔法で火を消して、後ろに身を引いて、距離をとる。

バハムート一匹はぎよりとこちらを見ている。

……倒さないと上いけない感じが、これは。なんて思っただけで冷汗が流れる。それなのに、益々自体は厄介になっていく。

そのバハムートの後ろからバシャツと二匹のバハムートが顔を出した。……って、ちょっと待て。一人でバハムート相手にしなきゃいけないのか……? どっちにしろこのままじゃ戻れないし、どうするか……。つか下手したらこっち側までプレス届くし……。

よし、とりあえず、やりますか。

どれだけできるかわからないけど、反撃しないわけにはいかない。というわけで、僕は魔法を行使した。

「業火の炎を求め。

願い続けるは、灼熱。

燃やしつくす事を願わん事を。

《ファイアーleeve5》」

頭の中で術式を組み立てる。それを思い描きながら、詠唱を放つ。

出現するのは、炎の塊。大きなそれは、バハムート一匹へと直撃する。

攻撃系魔法にはlevelがついているものが多い。術式は一つ一つ違って、levelが高いモノの術式は細かい。そして、威力も違う。

「ギョエエエエエエエエ」

バハムート一匹は暴れながら水面に隠れた。

残りの二匹は、ぎろりつとこちらを見ている。

僕はふうと息を吐くと、弓の狙いをバハムート一匹の目に定めた。鱗は確か結構堅いはずだが、目ならすぐに潰せると思ったのだ。

ビュンツと勢いよく矢を放つ。

その一つはどうかバハムート一匹の目に直撃した。途端に溢れだす、血液。バハムートは痛みに暴れまわる。

そうすれば、一人が、こちらを向いてブレスを吐いた。

どうにか炎はこちらまで届かないが、熱気が此処まで来て、どこか熱い。今は1の月だから肌寒い季節だというのに、ブレスは体を熱くする。

「《ウインドカッター》」

ぼそりつと一言言つて、現れるのは風の刃。

風の刃は、真つすぐにバハムート達へと向かっていく。

その刃は、バハムート達へとぶつかり、傷をつけていく。だけど、その傷は浅い。

バハムートから溢れだした真つ赤な血液は湖を赤く染めていく。

そんな中で、

「キエエエエ」

……そんな、魔物の声が聞こえた。

後ろを振り向けば、鳥がいた。こちらに敵意を見せてるのもあるし、明らかに魔物だ。

というか、くちばしでつついてこようとしている。僕は慌てて避けた。

バハムート三匹に、鳥一匹。

とりあえず、数を減らさなきゃ。本当にやべえ。鳥はともかくとして、バハムート…。何で三匹もいたんだ。

「《ファイアーlevel2》」

短縮詠唱で、鳥へと炎を放つ。放たれた炎は鳥へと移り、苦痛に鳥は暴れ始めた。

僕は、意識を精霊へと集中させる。

「精霊よ！　かのモノを運べ」

ただ、それだけの言葉。それと同時に、燃え上がる鳥は、風によって、バハムート一匹の口の中へと放り込まれた。

幾ら、ブレスを吐くとはいっても、口の中で燃えられたら、きついはずだ。現に食べてしまったバハムートは、苦痛に満ちた声を発して暴れている。

他の二匹のバハムートもその被害を受け、互いににらみ合っているのが、視界に映る。

よっし、これで共倒れが期待できる！　三匹のバハムート達は喧嘩するように、鋭い牙で攻撃し合っている。体当たりし、ぶつかり合う三匹。一か所にまとまっている、彼ら。

それを見ながら、僕は息を大きく吐いて、魔法を放つために、口を開く。

「雷撃、雷雲。」

望むは光、望むは雷鳴。

全てを滅するが故の、それを求め、

全てを無くすが故の、それを求め、
願うはチカラ、願うはヒカリ」

流石に強力な魔法には詠唱が必要だ。
あれをどうにかするための、詠唱…。

「チカラを愛し、

自らのチカラを持つて、滅ぼさん事を求め
自らのチカラを持つて、雷撃を落とす。

《サンダーlevel28》」

僕が使える、雷系魔法の、一番強いのをぶちかます。

僕らぐらいの歳だと、基本的にlevel1 20ぐらいの魔法
を使えるぐらいなんだけど、僕は一応28まで使える。

魔力がどつと、持って行かれる。ルークみたいに魔力量が異常な
ぐらいあればこのくらい簡単にできるんだろうけれども、第一、此
処に来るまでに魔法結構使ってたから、くらくらしってくる。

魔力回復薬を取り出そうと、《亜空間》を探る。

だけど、その前に、意識がもうろうとしはじめた。体が傾く。意
識が失われて行く中で、動かないバハムート達が視界に映った。や
ったのだろうか…、それとも気絶しているだけだろうか…、わから
ない。けどとりあえず、体が動かない。

「ユウッ！」

消えゆく意識の中で、ルークとアースの焦ったような声を聞いた
気がした。

山に登ります(3) (後書き)

ちなみにバハムートは幻獣辞典見ればわかりますが、魚としてのつてました。

世界を支えている巨大な魚で、一番最初の目撃者はイエス・キリストらしいです。

外見は…、私の妄想でほとんど成り立ってます。実際の魚のバハムートの外見よくわかりません。

ドラゴンじゃないのは敢えてです。なんか書いてたら湖に居る生物を出したかったので。ドラゴンとしてFFとかで出てるので、角とか生やしてみました。というか、他の魚と区別ついた方がいいと思います。

… かつこいい詠唱が書きたいんですが、うまくかけません。

目が覚めると

目が覚めると、真っ白な壁が視界に映った。

「んー…」

此処は何処だろう、そう思いがら目をこすって、体を起こす。僕はベッドに横になっていた。よく周りを見てみると此処は学園の保健室じゃないか。

ベッドの横の椅子にはルークが座っていて、眠っている。

僕何で気絶してたんだっけ…。そういえばバハムートが何かいて、それで色々やって…、あー、魔力切れか。

魔力量は僕はそこまで多くはないからなあ。平均よりは多いぐらいなんだけど、何だろうルークの魔力量は普通に成人男性の何十倍もあるから…。

「…んっ」

そんな事を考えていれば、ルークの瞼が開かれた。

「…ルーク、おはよう」

僕がそう言つてルークに笑いかけた。そうすれば、その瞳は大きく。そして僕が起きてるのを確認すると、すぐさま物すごい勢いで話しかけてきた。

「ユウ！ 目え、覚めたのか！」

ほっとしたように息を吐く、ルーク。

どうやら心配してくれていたらしい。安心したように、心配そうに僕を見るルークを見ると、何とも言えない気持ちになる。

「まあな、で、僕魔力切れで気を失ったんだろ、多分」

「そうそう！ そうだ、ユウ、これ！」

そう言つて、ルークは魔法具、『亜空間』——その名の通り亜空間を生み出す魔法具（収納用）から、モノを取り出す。取り出されたのは、バハムートの金色に輝く鱗に、角に、鋭い牙だった。

「…これって」

「俺と兄上が駆け付けた時、ユウが一匹やってて、俺と兄上で一匹ずつ狩った!」

…何だか、そんな軽く言われると悔しい。

でもまあ、あの時一匹やれたなら上出来かも。鱗とかあるなら魔法具作るのにも役に立つだろうし、売ってしまえばお金のたしにもなる。

バハムート…、巨大な水の怪物。それと対峙して、やったのだ。

昔より強くなれた、そう思えば思うほど嬉しくなる。

「なるほどね、じゃあ僕これで今度魔法具作ろうかな」

そう言って、立ち上がろうとすれば、

「ちよっと待て! 倒れたんだし、もっと休んどけよ」

そんな事を言われる。

まあ言ってる事は最もな事何だろうけれども、正直コロシムまで時間ないわけだし、僕は準備しなきゃだから眠ってる時間もっていない。立ち上がろうとするけれども、まだ少し魔力切れが取れてないらしく、少しふらふらして、僕は結局ベッドに入ったままだ。

「はあ…、それにしてもユウが倒れてた時、びっくりしたよ、本当」

「心配かけたみたいだね。ま、僕は大丈夫。ところでアースは？」

「あー、もう時間だとかいって帰ったよ、兄上は。あとで連絡してくれて言ってたけど…」

アースは帰ったのか、と少し残念に思う。まあ、仕方ないか。アースは働いているわけだし。

ふうと息を吐く。

バハムートの子供…そんな存在に遭遇する事は想定外だった。本当に、色んな場所に探検として足を運ぶたびに新発見が見つかって、楽しいと思う。危険だけでも、それでもああやって自然の中を進む事が、僕は好きだ。

「そういえば、メキシム達は？」

あいつらなら、ルークが帰ってきたらべったりくっついてそうだ

けど」

「…………あーと、一回保健室の中入れたら、騒ぎまくってたから流石に帰ってもらった」

追い返したのか、それはよくやった、ルーク。流石にふらふら状態であいつらと対峙するのは僕は疲れて嫌だ。でも、普段の態度見れば騒ぐのわかってるのに中に入れちゃうあたりはルークだなあ、と思う。

ルークと一緒に居ると、面倒事が降りかかってくる。

だけど、ルークは悪い奴ではない。それを知ってる。幼なじみじやなかったら、多分こんなに世話はやかないだろうけれども、なんだかんだでルークという親友って放っておけないのは僕自身なのだ。やっぱり、コロシアムではルークに勝てるように頑張るべきかもしれない。そうすれば、ルークは魔法の授業とかを真面目に受けるようになるかもしれない。

僕は、そんな事を思った。

目が覚めると（後書き）

少し短いです。

感想色々もらったので、少しずつ修正していく予定です。

コロシウム前日

とうとうやってくる、明日、コロシウムが…。

準備は色々やったつもりだ。モノに術式を組み込んで魔法具を作成して頑張ったつもりだ。

バハムート退治の後（今思えばよく一匹でも倒せたものだ）、僕は学園内に精霊がいるかを確認した。食堂の料理場の近くに、火の精霊が居るのが確認できたから、もしかしたら力を貸してもらえうかもしれない。

自室で、明日の準備をしっかりと行っていたら、部屋の扉がノックされた。

誰だろう、ルークか誰かか？

僕はそんな事を思いながらも、ドアを開ける。

そこに居たのは、ルークと、セト先輩とマー先輩だった。

「あれ、ルークに、セト先輩に、マー先輩…、何か用ですか？」

僕がそう問いかければ、話があるから入れてくれ、そう言われて僕は三人を部屋の中に入れる。そうして、紅茶を三人へと差し出した。

「突然押し掛けてすまない」

「いえ、それは全然いいんですが、どうかしたのですか？」

「ヴェーセントには話したのだが、明日からコロシウムがあるだろう？ 何でも有りが故に問題が起こる可能性があるのだ。一応生徒会役員と風紀員が見回りをする予定なのだが…、何分この学園には生徒数が多い分、対処しきれない所があるのだ」

そんな話に、生徒会も大変なんだな、と僕はただ思う。

この学園の生徒数は、中等部だけで2000人近くいる。生徒会役員が、6人に、風紀員が確か18人だったか…。それだけで、全員を見るのは難しいのも仕方がないとも言える。

「ユウ！ 会長さんは、俺に見回りを頼んだんだ。暇な時でいい

から見回りをしてくれって！」

「……僕にも見回りをしてほしいって事ですか？」

僕が問いかければセト先輩は頷いて言う。

「そうだ。ヴェーセントと一緒に少しでいいから周りを気を配ってほしい。そして問題が起きたなら、最善を尽くしてほしい。頼めないだろうか？」

正直な感想を言うと、僕はそんな面倒な事したくないと思った。

誰が面倒事を起こそうが、僕やルークとかに被害がかからないならどうでもない、そう思ってしまう。ルークは、上級生から強い奴として知られてるし、ルークに突っかかる奴いないだろうし、だからルークに頼んでるんだろうな……。僕がどのくらいの強さだろうと、ルークが居るなら対処できるとでも思ってるんだろうか？

「……我は生徒には怪我をしてほしくないのだ。そんな我が、ヴェーセントやリルドに危険かもしれない対処を頼むのは間違っているかもしれない。しかしだ、ヴェーセントは神童と評判が高く、リルドは信頼に値する人物だと我は評価している。

メキシム、セルフアード、アイワードも確かに實力はあるにはあるだろうが、あの三人は私情に走る可能性があり、どうも信用が出来なくてな……。ヴェーセントはリルドの親友だと言うし、どうにか対処してくれると思うのだ」

……何か嬉しい事言ってくれてる。

誰かに信頼されるって、何だか嬉しくなつて、心が温かくなる。

見回りとか、そういう事は面倒だとは思う。だけどセト先輩は生徒思いだからこそ、被害を出したくないからと僕たちに自分たちが対処できない時の保険として頼んでくれているのだ。

：そんな信頼とか、そんな強い頼みとか、何だか、うん、拒否できないなっと思う。これがむかつく奴の頼みだったら僕きつと、断つてたけど。セト先輩の頼みなら、聞いてもいいかなってそんな思になる。

「わかりました。セト先輩の頼みならやります。ところで、マ-

先輩ももしかして見回りを頼まれたんですか？」

「うん、そうだよおー。ルー君と一緒にのんびりしてたらねえ。イリちゃんがね、私たちに頼んできたの。私、イリちゃんの事大好きだから、喜んで承諾したんだあ」

「マァ先輩って、本当、何か素直な人だなとただ思う。」

「うん、やっぱりハーレム陣の中で一番マァ先輩がいい人だよ。」

「…で、ルークは何で黙り込んでんの？」

「僕が問いかければ、ルークは何とも言えない表情で口を開く。」

「…いや、会長さんが、ノアや、ミクやルミの事信用できないって言ってるのが、悲しくて」

「ああ、もう、こいつは！ と僕は思ってしまう。」

何て言うか、基本的にルークって、こういう奴なのだ。自分に優しくしてくれる人が、悪い風に言われると悲しそうな顔をして…。なんていうか、人を信じすぎているとも言うべきなのか…。皆仲良くが理想的な奴なのだ。

何て言うか、馬鹿で、人の本質を見分けられなくて、それで信じてしまっただけ、近くに居るこっちがハラハラしてしまうほどに不信心なのだ。そこがルークのいいところとも言えるかもしれないけど、どうかその不用心さをなくして欲しいと僕は思う。

「まあ、奴らはルークにはいい顔してるからね。だからルークは奴らが好きだって思うんでしょ？ 友達として」

「うん…」

「でもさ、ルークは人を疑って、人間の中には悪い奴だっているって、ちゃんと知っていかなくやだめだぞ？」

「言い聞かせるように、ルークに言ってやる。」

本当に、もう少しちゃんとしっかりして、当主として自力で立ていけるってぐらいの人間になってもらわなくや、こいつの将来が不安でたまらない。

第一次期当主になるには申し分ない強さとカリスマならこいつは一応持っている。ただたんに、性格が少し当主になるには問題があ

るのだ。ルークは基本的に人を誰でも嫌いにはならないのだ。それは時としていい事であって、時として悪い事だ。

……ルークが誰かに憎しみでも持つてくれれば、手っ取り早く敵に対する容赦なさをこいつが身につけてくれるのではないか、とか僕は思う。

「メキシムやセルフアードやアイワードはな？　僕からすれば性悪女だぞ？　お前がどう信じていようがな。まあ、人それぞれ人に対する意見は違うだろうし……セト先輩が奴らを信用できないっていうのはだな。周りから見て奴らは信用できない、自己中に見えるわけだ。

当事者である、ルークは優しくされるから善人に奴らが見えるかもしれないけどな」

「性悪女って……、俺ユウも皆も大切だから皆で仲良くしてほし
いつて思うのに……」

悲しそうな顔をするが、そんなルークに僕はばつさりという。

「無理だね。というか、あっちは僕の事完璧嫌ってるし、そして僕もあいつら好きじゃない。ほら、嫌い同士で仲良くできるわけないだろ？　まあ、ルークは奴らと居たいのかもしれないけどな？」

僕がそれだけ言えばルークは黙り込んだ。

僕はそんなルークは放置することにして、マー先輩とセト先輩に向かい合う。

「あとどれくらいの人に頼んだんですか、見回り」

「我や生徒会メンバーの信用できるものにそれぞれ頼んではおる
ところで、ヴェーセントは放っておいていいのか？」

「いいんです。こいつは、人を信用しすぎてますから、その事について色々考えてもらわないといけないので」

「……そうか」

「はい」

それからそのまま、黙って色々考えているルークの隣で、僕と、ルークを心配そうに見つめるマー先輩、そしてセト先輩での会話を

続けた。

しばらくして、三人は帰っていき、僕は明日のために眠りにつくのであった。

コロシァム前日（後書き）

少しずつ編集作業もしていこうと思います。

ああ、それにしても何で作者には毎月憂鬱期みたいながあるのでしょう、と微妙にうんざりしますが、小説書いて気晴らしです。

お気に入り数が増えてたり、感想もらえると元気出るので、応援してください読者様に感謝です。

まずは、予選と行きましょう(1)

今日は、コロシアムの予選の日。

会場には、沢山の人々であふれている。コロシウムを見るために、観客席にも人が溢れてる。将来有望な生徒を見るために軍やギルドの人達だって来ているのだ。

がらにもなく、少し緊張してしまう。

あんまり僕は緊張しないほうだけれども、これだけの人に囲まれた中で、戦うというのは少し、緊張する。それに今回の目標はルークを倒す事なのだ。

あのルークを倒す。

それは僕からすれば難しい事で、できるかわからないくて、ドキマギする。

「ユウ、今日は頑張ろうぜ」

にこやかに笑うルーク。何だか余裕そうな表情に少しいらついたりこいつは、いつもそうである。いつだって余裕そうで、いつだって不安を感じずに生きている。全てがうまくいつてきたからの余裕というべきか…。

「キヤー、ルーク頑張って」

「ルークさんっ」

「ルーク、頑張りなさい」

メキシム、セルフアード、アイワードの声が響く。

奴らはルークが出るからルークと敵対したくない、なんてアホらしい理由でコロシウム二出なかった。この学園には真剣に強くなるうとしていない人が結構いるというのに、恋に夢中なアホな連中である…。

この学園……とはいっても中等部の生徒数は2000人だ。

そのうちの500人がこのコロシウムに参加するらしい。

で、予選では、10人ずつのバトルロイヤルをやって、勝ち残っ

た人が、本選進出という形らしい。

要するに50人のトーナメント戦になるわけだ。

ちなみに、僕はくじを引きにいったら、Aグループだった。で、セト先輩がDで、ルークがF。

上級生もいるわけだし、頑張らなければ、そう意気込んで、僕は拳を握る。

「では、予選を始めます」

そんな言葉を聞き、僕は舞台の上へと、足を進めた。そうして、予選は始まるのだ。

まずは、予選と行きましょう(1)(後書き)

短いです…。次から予選の戦いになる予定。
戦闘描写とかうまくかけないですが、頑張って書きます。

まずは、予選と行きましょう(2)(前書き)

生徒数間違えてたので、変更しました。

まずは、予選と行きましょう(2)

10人でバトルロイヤル。

それで、僕、滅茶苦茶狙われてんだけど。え、何？ 一年生だから、弱そうだから、さっさと倒しちゃおうって事？

…何か、むかつく。甘く見すぎっていう、話で、詠唱する暇は与えない、とても言う風に僕に向かってくる先輩達。みなさん、斧やら、剣やらかかげてる。

んー、僕一応基本的な武器は弓だし、接近されるとやりにくい。とはいっても、他の武器だってちゃんと使えるは、使えるんだけどね。

普通は、皆一つの武器しか使えない人多いんだけど、僕は色々試して、習ってみたから、一応何個かの武器は使える。小遣いをためて買った魔法具《亜空間》の中へと手をつつこんで、長剣を取り出す。

流石にルークのように、魔法具ではないけれども、自分で作った魔法具とか売って、ためたお金で作ってもらった、長剣だ。まあ、一級品とは言えないだろうけど、そこそこの出来の長剣だと思う。

そして、僕は突然、長剣を取り出して驚いている先輩一人を、躊躇いもなく切った。

…とはいっても、この会場の中には、治癒効果とかかけられてるらしいから、ひどい怪我を負った瞬間、怪我が回復して舞台の外に出されるらしい。試合続行不可能と判断されて。

僕が切った先輩も、かなり深く切ったから、舞台の外側へと移動されていた。

それと同時に、周りの残り八人の先輩達——とはいっても同級生が居るかもだが、基本的にこの大会は二、三年生が主に出場する——の、表情が変わった。

…どうやら、僕への弱そうという認識は改めてくれたらしい。

僕は、結局先輩二人と三人で争う事となり、あとは、一対一でや
つてる人と、三人でやりあつてる人に別れた。

あー、とりあえず頑張らなきゃ。

僕の目標はルークに勝つ事であるし。

僕がやり合う事になった、二人の先輩の武器は、長剣と槍だった。
それで、僕は一応右手に長剣を握つてる。もう少し距離が開いてい
るなら、弓で攻撃してもいいんだけどね。

さあて、いっちょやりますか！

「精霊よ！ 僕の声聞き、僕に力を貸して！」

精霊を感じ、それを願う。

目の前の先輩達は、精霊魔法を使うと思わなつたのか、ぎよつと
した表情を浮かべる。

…精霊は僕の願いを聞き届けてくれ、一人の先輩に向かつて、火
球が放たれた。僕はそれを感じ取ると、もう一人の長剣使いの男の
先輩に向かつて、剣を振り下ろす。

だけど、それはカキンという音を立ててはじかれた。

ちらりと、もう一人の槍を持つ先輩を見れば、火球を結界によつ
て、はじいた模様。

調理場に居た、僕が力を借りた精霊は結構な力を持つてたらしく、
魔力は消耗しているみたいだけれども。

僕はそれを見ると、足へと魔力を集中させ、空へと飛んだ。

僕が飛んだのは、履いている底の厚い靴が理由である。

僕が編み込んだ、飛行魔法の魔法具。…魔法具作成には結構な時
間がかかるから、ギリギリでできたのだが、まにあつてよかったと、
僕は思う。

そして、僕は、二人の先輩、そして、他の人達とやり合う参加者
に向かつて、言葉を放つ。

「《ライトアローlevel7》」

詠唱破棄を行い、その魔法を、僕は発動させた。

空中に現れた弓は、僕が敵とみなした全てに向かって、矢を放ちつくす。

……僕と敵対していた二人はともかくとして、他の先輩たちに関しては、完全なる不意打ちである。

とはいっても、これは何でもありませんだから、ルール違反ってことは無いはずだ。

「《アクアウォールlevel8》」

誰かが、結界魔法を発動させる声がする。…何人かは倒せてればいいけど。それを思いながら、僕は空中を飛行しながら、靴に触れて、もう一つの効果を発動できるように準備をする。

そうして、舞台を見れば、3人は不意打ちだったためか、舞台の外へと出されたらしい。

残り、五人——。

僕が全員に一齐攻撃したからだろう、向こうも僕に向かって攻撃を放ってくる。

「求めるは、灼熱。願うは、煉獄。

燃えよ、燃えよと我は求める。」

《ファイアーブレスlevel13》」

一人の女の先輩——黒髪をなびかせた先輩が、僕に向かって魔法を放つ。結構広範囲の魔法だ。…避けるより防いだ方がよさそうだというわけで、僕は《亜空間》から透明な、それでいて、魔法陣の

描かれたそれを取り出す。

僕の体をすつぽり埋め尽くす薄い、膜。

それは、炎の魔法――、先輩の口から放たれる炎から、僕を守るようにして、結界を展開させる。結構、細かい魔法陣だから、防ぐ事はできた。

ふう、と一息を吐く。

そして、僕は一瞬にして、舞台の上へと降りると、厚底から出現した、車輪……まあ要するにローリースケートにもなるのである、で舞台の上を駆けまわる。

意味もなく、そんな事をしているわけではない。幸いにも、五人の先輩達の放つ魔法は、ローリースケートのスピードで避けられる事が可能である。僕はよけながらも、意図的に、舞台の上をかけた。

「《アクアプレス》」

「《ライ……》」

先輩達が、言葉を放ち終える前に、僕の目的は終了した。

「発動せよ」

僕はただ、小さく呟く。

それと同時に、僕が、ローリースケートの舞台との接触部分によって、描いた、魔法陣が、発動する。

……説明をすると、この靴には飛行魔法と、ローリースケートの接触部分に僕の魔力と混ざり合うインクを仕込んでいたのである。ただのインクに、自分の魔力のパスをつないで、魔法を発動させることも可能だが、自分の魔力をインクと混ぜ合わせた方が、断然魔法の威力は違う。

現に、僕の描いた巨大な魔法陣によって、出現した炎は、一気に僕の背の高さぐらいまで燃えつくさんとしている。僕は魔法陣の範囲外にそれているからいいが、五人の先輩たちはこの炎を思いつきり食らっているわけである。

…一人はその魔法陣でもどうにか、負けにはならなかったのだが、

後は剣術で僕が相手を打ち負かし、僕は勝利した。

うん、とりあえず、予選は進出できた。しかしまあ、僕は魔力はルークみたいに異常にあるわけではないし、もう少し魔力を最低限に抑える戦い方をしなければ、と心の中でただ思った。

「勝者、ユウ・リルド」

そんな言葉に、何だか、笑みがこぼれた。

まずは、予選と行きましょう(2) (後書き)

正直、うまくかけている自信は皆無です。

戦闘シーンは正直言って、苦手です……。うまくかければいいな、とは思います。

ユウは何気に強いです…。ルークは魔力量とか色々異常ですけど。

次は、生徒会長さんか、ルークの予選にする予定…。

まずは、予選と行きましょう(3)

僕は今、観客席の方に来ている。

僕の試合はさっさと終わったので、のんびりと、観戦する事にしたのだ。

Bグループ、Cグループの試合は、大体全員が互角ぐらいの強さで、苦戦して勝利した模様だ。

そうして、Dグループ。セト先輩の試合である。

Dグループの選手たちが、舞台へと歩み出す。そうすれば、

「生徒会長！ 頑張つて」

「セトモレア先輩！ 頑張ってください！！」

沢山の、応援の声が響いた。流石、セト先輩。生徒たちに人気あるのだな、と僕は思った。まあ、セト先輩は生徒思いな良い先輩である。だからこそ、皆セト先輩を慕うのだろう。

「生徒会長さん、頑張つて」

そうして、控室の方から、ルークの応援も聞こえた。

……ルークよ。お前は自分の心配をしる。いや、強いからすぐに勝てるかもけどさ、次の試合なんだから。そしてルークが応援したらハーレム三人衆（アフライ先生は会場の警備やらで居ない）が凄い勢いでセト先輩を見ていた。

僕は、うわぁ、と思う。

何て言うか、セト先輩はルークにそんなに興味などなさそうなのに、何やってんだよ、みたいな。

そうやって、一瞬だけ、僕は目を離していた。

そして、次に舞台へと視線を向けた時——、試合はすでに終わっていた。

……立っていたのは、セト先輩だけだ。って、今の一瞬で何をしたのだろうか。僕には、わからない。相手が弱すぎたのか、セト先輩が強すぎたのかわからないが、ワアアアアと歓声がその場を

支配する。

「生徒会長様、かつこいいー！」

「流石です！！」

次々と、セト先輩への歓声が響く。

いや、本当に何をしたんだ、セト先輩。近くに居た同級生（声をかけたら嫌な顔された）から話を聞いた所、凄まじいスピードでセト先輩は次々に対峙している先輩達を気絶させたらしい。セト先輩も圧倒的に強く、戦っていた先輩たちは大会でも強さでいうと下の方の先輩達らしいが、それでも一瞬でやってのける先輩の凄さに、僕の心は熱くなる。

ああ、と思う。

圧倒的な強さに、僕は憧れる。強くなりたいって、昔からどうしようもなく望んでいるから。だから、そういう強さにあこがれ、そういう強さに触れると、心が熱くなる。

僕も、強くなりたい。強く、強くなりたい。

そればかり、望んでいる。

セト先輩、本選出場決定。

次は、ルークの試合だ。

まずは、予選と行きましよう(3)(後書き)

んー、あっさりセト先輩の予選書きすぎかな?と思う、作者です。
だけどイメージ的に生徒会長は圧倒的に強いので、そうだったので
すが……。

まずは、予選と行きましょう(4)

次はいよいよ、ルークの番だ。

観客席に僕は相変わらずいるわけだけど、隣に、セト先輩がいる。

「ふう、我は速く強者と戦いたいものよ」

などと呟くセト先輩は戦闘狂なのではないか、と僕は思う。

それにしても、セト先輩が隣に居るからか、周りの男子生徒達が僕を睨んでいる気がする。セト先輩に好意を抱いている男子生徒だろうか？ とはいっても僕がセト先輩と何かあるって事はないのだが、そう思うと苦笑いが浮かぶ。

「じゃあ、ルークと戦う事あったら全力でぶつかってみたらどうですか？」

「ヴェンセントはそんなに強いのか？」

「そうですね。ルークは魔法の威力とかなら、同年代で一番強いと思いますよ。何て言えばいいんでしょうか、ルークは魔力量と、魔法の才能、剣術の才能があります」

「ほお？」

「でも、最近怠けってます。ルークは人に頼まれると断れないという非常に厄介な性質を持ち合わせています。だから、あいつらのせい、というよりルークのその性質のせいで、強くなりたいという意志が今のルークからは感じられません」

…昔は確かに、ルークは強くなろうと願っていたはずだ。アースの後ろを僕と一緒に付いて回ったはずだ。ルークは人に頼まれたら断れない、だから徐々にそう言う事をしなくなった。とはいっても学園に入る前はそれなりに訓練をしていたはずだ。

怠惰の元凶にはハーレム陣達も関係しているが、一番はルークにある、圧倒的な自信だと僕は思う。対して努力をしなくても、勝てたのだ。ルークは、自分の強さに満足してしまっている。

だから、

「その、自信を叩き折ってほしいんです」

僕は、セト先輩に向かつてそう言った。

「自分ではやらないのか…?」

「できそうなら、やります。でも、僕じゃルークに勝てるか、微妙な所なので」

そう言えば、

「じゃあ、頑張るがよい。我はリルドを応援しよう」

と、笑ってくれた。

そんな風になっているうちに、ルークの試合は始まった。

ルークは男達と向かい合っている。対戦相手の男達はギラギラした目でルークを見据える。本当、ルークは周りに無意識に恨みを買う奴である。

男達が一斉にルークへと襲いかかる。

「てめええ、ノアちゃんをたぶらかしやがって」

「セルファードさんを!!」

…ああ、なるほど。メキシム達のファンっていうわけか。正直何処がいいのか全く分からないけど、ハーレム陣達は人気らしいからな。

ルークは、イーサを鞘から引き抜くと、男達に向かつて振り下ろしていく。素早い動きだった、一人一人に剣を振り下ろしていく。もちろん、相手側もふさごうとしているのだけど、そこは流石ルークである。

男達が必死で防ごうとしているにも関わらず、イーサは男達へと振り下ろされた。

…そうしてルークは魔法も使わずにあっという間に相手を倒して

しまった。

『ルーク・ヴェーセトン！ 本選出場決定！』

司会者の、声が響き、会場がざわめいた。

ルークは、一年生だし、圧倒的な力を見せつけられ、周りだって驚いているのだろう。何より、ルークは魔法を一切使っていないのだ。

ルークは、”天才”。元から素質があつて、やれば基本的に何でもできる、そんな天才。

——だからこそ、できるなら僕が、その自信をへし折ってやりたいのだ。

まずは、予選と行きましょう(4)(後書き)

あっさり書きすぎた感じが消えない。

んー、しかしルークって強い設定だから予選だし、こんな感じでいいかなと思って書きましたが、もっと細かく戦わせた方がいいですかね？

喧嘩を売られました。

本選の対戦表が発表された。僕は一番最初は、ロツシュ・バウナ
ーとかいう、一年生とやり合うようだ。

ちなみにルークと戦えるのは、三回戦だ。まあ、僕とルークがそ
こまで残ればの話だが。でも、ルークは残ると思う。というか、残
ってもらって、僕は勝ちたいから、残ってほしいと思う。

ルークに勝つ事。それが、目標だから。

今は、丁度本選が始まる一時間前。

ああ、少し緊張する。大勢の前で一对一で戦いあう。それに興奮
を覚えるけれども、やっぱり、緊張するのは当たり前だと思う。

それにしても、本選って言う事は、予選を勝ち抜いたメンバーし
か居ないわけで、僕はそんな中で、勝ちたいと願ってて、ああ、と
思う。

「ルークさん、頑張ってください！」

「ルーク、わたくしのために頑張りなさい」

とりあえず、僕は自分の事に専念したいから、ハーレム陣はスル
ーする事にする。

というか、ルークはあれだけでもてるのに、何故誰とも付き合おう
としないんだろうか、謎だ。まあ、ルークは鈍感なだけけれども、
根強く告白して、気持ちが伝わった人もいるのだ。

でも、そういう人間もルークは断った。

ルークは基本的に相手からの告白を根強くされてからじゃないと
気付かないというか、恋愛感情を信じないっていうか、そういう感
じが結構あるし。とはいっても見ている限りルークはメキシム達に
恋愛感情なんて欠片もないみたいだけれども。

さて、とりあえず明日はどうやって戦おうか。

一学年で予選を勝ち抜いたって事は、相手が強者であるという事
だ。それなら、僕は頑張らなければいけない。

次の試合に勝たなければ、ルークと戦う事もままならない。

そんな事を考えながら、思考を巡らせていけば、

「――お前が、ユウ・リールドか」

声が響いた。

そうして、そちらを振り向けば、黒髪の活発そうな少年が居た。

僕は思わず、誰だ？ と首をかしげてしまう。

「俺は、お前に勝つ――」

「……もしかして、次の対戦相手？」

突然、勝つ、なんていわれたものだから、僕は驚いて、そうして問い掛けた。

「そうだ！ 俺はお前に勝つ！」

「はあ…そう」

何で、こんな初対面でいきなり敵対感情を向けられているのか、正直謎である。いや、僕の評判悪いだろうけどさ、何でこんな睨まれているだろうか。

「俺が勝つたら、会長の傍から離れるー！」

……理解した。この男、セト先輩が好きなのか。それで僕に敵対感情持つてて、離れると言ってるわけか。

んー、別に僕はセト先輩にそういう感情ないし、てかあるわけないし。セト先輩は良き先輩なだけなんだけど…。

「…僕は」

「お前なんて、ヴェーセトンの金魚の糞のくせに！」

「は…？」

「ヴェーセトンが強いからってその権力を振り回してるような男が、会長の傍に居るなんて許されないんだー！」

いやいやいや、ちょっと待て。

権力って何。金魚の糞って何。え、何僕周りにそんな風に認識されてんの…？

「拳句の果て、メキシムさん達ともヴェーセトンの友人としていやがってー！！ メキシムさん達にはお前なんて似合わないんだ！」

釣り合わないんだ！」

「いや、だから何でそう認識されてんの！？」

「事実だろうが！ とりあえず、お前が予選を勝てたのはヴェーセトンの権力を振りかざしでもしたんだろう！ 俺が倒してやる！」

「…いや、だから何で——」

反論する前に、彼は背を向けて、ズカズカと去っていった。

……とりあえず、僕が強くなりたいてって色々やってるのに、それを全部権力で片づけたわけだよね、あの男。

ルークの権力、僕が使ってるって。メキシム達といっそに居るのは釣り合わないって。

なんていう、認識…？

いや、うん、ちよつとムカツと来たから、絶対勝とう。いや、もう絶対ぶちのめす。そもそも会長さんとは仲良い先輩後輩のままで居たいし、離れろって言われても困るし。

やっぱり、勝たなきゃな、と僕は思った。

ロツシュ・バウナー

…ロツシュ・バウナーとの戦いの時間がやってきた。

ああ、とりあえず、いいたい事はムカツクの一言。喧嘩売られるし、言いがかりつけられるし、何か本当、日頃の鬱憤をロツシュ・バウナーではらしてやろうか、なんて思う。

まあ、ロツシュ・バウナーがどれだけ強いかなんて僕にはわからないけど。

『これより、ユウ・リルドとロツシュ・バウナーが入場します』
司会者の、声が響き渡る。

司会を務めるのは、放送部に詰める先輩だ。そうしてその隣には、放送部顧問のリアナ先生が並んでいる。

…リアナ先生は可愛い系の教師である。正直可愛いとか綺麗だとかいう女の人って、結構ルークに靡く確率が高いから苦手だ。

『では、まずは選手の紹介です』

選手の紹介、ねえ？　なんて思いながら、前を見れば、何故かロツシュ・バウナーは得意げにニヤニヤしていた。気持ち悪いな、何か…。というか、バウナー家って確か、侯爵か何かだった？

『まずは、ユウ・リルド！　彼が本選に残るとは誰か想像したでしょうか！　正直な私の感想を言いますと、予選を見るまで、ルーク・ヴェーセトンの取り巻きとしか認識していませんでした』

って、おい、とつつこみなくなる個所が何箇所もある、けど、まあ、いいか。

『ヴェーセトンの幼なじみとしてメキシムさん達の傍に居られるなんて、なんてうらやま…——すみません、本心でした』

あんなののそばに居られて嬉しいか？　やっぱり顔か、顔なのか…。あと家柄か？　ルークも結構完璧だからって理由でもてる節もあるだろうし。女って完璧とか、家柄とかがいい男ってのが好きなんだし。僕にはそんな気持ちさっぱりわからないけれども。

『次にロッシュ・バウナー選手！ バウナー家のご長男！ 文武両道の、圧倒的強者であり、学園中の人気者……？ って、バウナー選手！ 読めといわれて読みましたが、何だか自信過剰すぎないかー！？』

自分で、文武両道……？ 圧倒的強者……？ 学園中の人気者……？ ナルシストなのか、こいつ。そして司会者を睨んでも仕方ないと思うぞ、ロッシュ・バウナー。

『えーと、ヴェーセトン家の権力を使い、女を泣かせてきていて、生徒会長にまわりついている、ただの弱虫、ヴェーセトン家の権力で予選を勝ち抜いた……？ リルド選手には絶対に負けない、らしいです。バウナー選手は』

……だから、お前は僕をどう見てるんだ！ まずそこを聞きたい。そして権力なんて使ってないし、そんな面倒な事するわけないし。そして、セト先輩とはただの先輩後輩だし、……何より、やっぱりむかつくのは僕が弱いって思われてる事。

昔よりは、強くなってきたって、思ってる。強くなりたいって思ったから、強くなろうと努力した。そして、今の僕が居るのに、その努力が権力による強さだとかわけのわからない言いがかりつけられるのは、流石にいやだ。

……よし、ぶちのめせよう。こういう男嫌いだし。僕嫌いな奴にこういう場面で容赦しようとも思わないし。僕が弱いって認識なくしてあげよう、てか、その体に刻んでやる。

『——では、ユウ・リルド対ロッシュ・バウナーの試合を始めます』

そうして、僕とロッシュ・バウナーの試合は始まった。

……結論から言うと、ロッシュ・バウナーは驚くほどに、予想以上に弱かった。

とりあえず、僕は武器は一通り使えるし（一番は弓）、アースに
武術とかも習ったから、接近戦もいけるつもりで、剣とかは、『亜
空間』から出せばいいかなあと接近してみたわけだ。

長剣もつてる、ロツシュ・バウナーに。

右拳を振りあげて、ロツシュ・バウナーの顔面にまず、一撃叩き
こんだ。そのあたりで、あれ？　っていう違和感があった。だって
それだけでロツシュ・バウナーはふらついていた。

そして、ロツシュ・バウナーが反撃とばかりに、長剣を振り下ろ
してきたのだが、それがもう、遅かった。振り下ろされるのは遅い、
剣術は型にはまっていない。何だろう、ただ使い方のわからないも
のを振り回しているようにしか見えなかった。

いや、はつきりいおう。ロツシュ・バウナー。お前、剣で戦った
実戦ないだろ？　あるなら、剣の才能ないだろ！？　としか、言い
ようがない、剣術だった。

魔法もそうだ。

ロツシュ・バウナーは長々と詠唱を唱えて、隙だらけだった。せ
めて、詠唱を唱えながらも、隙を見せないとかならともかく。隙
ありすぎだった。

此処まで来て思った。

ロツシュ・バウナー、お前何故本選に残れた！？　と、そんな疑
問を。正直いって、僕が予選で戦った先輩達よりも弱いと思う。

とりあえず、此処までくればロツシュ・バウナーの弱さがわかつ
たので、弱い者苛めをする気もないために、拳をたたきこみ、気絶
させた。

……再度聞きたい。ロツシュ・バウナー、何故本選に残れた。

そして、僕に散々ルークの権力使って本選残ったといっていたく
せに、お前がもしかして権力使って、予選通ったんじゃないだろう
な…？

『勝者、ユウ・リルド！ 驚くほどの、バウナー選手の弱さ！
そういえば予選ではバウナー選手の取り巻きらしき人が、周りを
倒して、それで棄権していましたねえ……。ああ、やっぱりあの言え
といわれた圧倒的な強さってありえない嘘ですね』

本人気絶してるからか、さらっと、ありえないなどと言って苦笑
している司会者。

本当に、権力使ってたのか！？ それで自分を強いつていった
のか、しかも。

んー……。何だかなあと思う僕である。

狙われました。

「覚悟おお」

…自分の試合が終わった後に会場を見周り、それが終わってしばらくして、一息ついて、ベンチに腰掛けていたら、突然そんな言葉とともに、ある一人の少女が現れた。

黒髪の可愛い少女が、長剣を片手に僕に向かってくる。

って、いきなり何なんだ！？ そんな事を思いながら、僕は少女の攻撃を避けた。

それに対して、少女は悔しそうに、忌々しそうにこちらを見つめる。

「何で避けるんですか！？」

「いや、逆に聞くけど何で避けないの？ そして覚悟とかいいながら襲いかかっても敵にばれるだけで効果的な襲撃方法じゃないと思うんだけど」

本当に、襲撃とかして僕をどうにかしたいっていうならもっと頭を使えばいいのに。そもそも覚悟なんていいながら襲いかかって来て何になるんだか。

この少女の何処までも浅はかで、馬鹿な考えに呆れそうになる。

第一、軍に入りたくて強くなるために色々してる僕が、気配に気付かないとでも思ってたんだろうか？

僕は平民だし、ルークのそばに親友として、幼なじみとしているからって狙われた事はある。だから、自然と色々と自分を守るすべも身についていった。アル様とか、アースも強くなりたいていった僕に色々教えてくれたし。

「くっ、あなたは大人しく切られていればいいんです！ あなたのせいで、あなたのせいで… ロッシユ様がつ…！」

…わかった。この少女はロッシユ・バウナーの取り巻きなんだな。何であんな、なんというか、駄目な奴にこんな可愛い取り巻

きが…？ 謎すぎる。それにしても、やっぱりどうも美少女とかって苦手だ。基本的に厄介事に絡んでいる気がする。

再度、長剣をこちらに向けてくる少女。

ロツシュ・バウナーの事を尊敬しているのか、それとも恋愛感情でも向けているのかわからないけど、ロツシュ・バウナーが本選への出場を果たしたのは、この少女のおかげなのかもしれない。

「本選に出場出来た時！ ロツシュ様は喜んでくれたのにつ。あなたのせいで、あなたのせいで！ ロツシュ様が落ち込んでおられるのです！」

「…いやいやいや、あんな実力で本選出場してもさ。なんとか、うん、ロツシュ・バウナーの実力で勝たせてやるのが一番だと思うんだけど」

「それが出来れば苦労してません！ ロツシュ様には壊滅的に戦闘に関するスキルがないのです…！」

「それは、ご愁傷様としか…。つか、それならそれでさつさと諦めて文官でも目指した方がよほどロツシュ・バウナーのためになると思うんだけど…」

「それは駄目です！ ロツシュ様は、強くなつて戦いたいんだそうなので！ だから私がロツシュ様を強く見せて、ロツシュ様のために動くのですっ」

「…いや、強く見せるってそれ君の実力があるって周りにさらすだけじゃない？ そもそもそれじゃ駄目だと思うんだけど」

取り巻きの力で強くなつたように見せかけられても所詮はそれは偽りでしかないわけで…。才能ないならないで、んな、取り巻きの力使つて上に上がるうとしないで別の事に力入れるよ、とつつこみたくなる僕である。

「君もさ、ロツシュ・バウナーのためになんないって事気付きなよ。誰かに頼ってしか生きられない、みたいになつたら情けないにも程があるし。そもそも周りからすれば女の力借りて生きているって死ぬほど情けないと思うんだけど」

うん、本当に情けないと思うんだよね。女の力借りて強く魅せられている男って。

もっとなんつか、表面的な面だけじゃなくて、本当にロツシュ・バウナーのためになるかどうか、この女の子は考えるべきだと思うんだけど。

まあ、それはルークにまわりついてるあの、ハーレム陣にも言える事だけど。

なんというか、あいつらも皆なんか単純っていうか……。表面的に見て、自分の考えが正しいと思いこんで行動してるっていうか……。客観的に見たら色々見方変わると思うんだけどなあ、なんて思う。

僕から見れば、ロツシュ・バウナーがこの少女に支えられて生きるの死ぬほど情けない。

だから正直に言っただけで、何だか少女にショックを受けたような顔をされた。

「そんなん、私がロツシュ様のためにとやっていた事は、ロツシュ様のためにならないのですか!？」

「ロツシュ・バウナーは喜んでるかもしれないけど、周りからみたらなんというか、情けないって評価に陥るだけだね」

「……ロツシュ様が、情けなく見られるなんてっ！」

私、私! あの方がかつこよく見られるように色々考えてみます!」

「うん、そうするといいよ。僕もロツシュ・バウナーがまともになつて僕に突つかかってこない方が楽だし」

「はい、頑張ります! 全てはロツシュ様のために!」

何ていいながら、少女は走り去っていった。

つか、あの子、途中から僕の事を狙ってきた事忘れてないか? 何だろう、こういつちゃ悪いけど馬鹿なのか? まあ、ロツシュ・バウナーの事何故か本気で好きみたいだから、ロツシュ・バウナーをまともにしてくれる事を願っておこう。

狙われました。(後書き)

最近忙しいので、投稿遅れました。
次は、転生の方を更新出来たらする予定です。

本選第二回戦（1）

ロッシュ・バウナーの取り巻きの女の子に狙われている間に、ルークとセト先輩は勝利していたらしい。流石、あの二人といふべきか…。

その後、僕は他の試合を観戦し、僕の第二回戦が、始まるうとしていた。

相手の試合も見た。僕と同じ一年なんだけれども、中々強い人だと思った。とはいっても、まだまだ実力を隠しているようなそんな雰囲気だったけれども。

「ユウ、頑張れよ」

そう言つて、ルークが笑いかけてくる。僕はそれに対して片手をあげるだけの返事をした。周りのハーレム陣達はこちらを見て何か妬ましそうに見てたけど、気にしても仕方はない。

というか、本当ルークはさっさとその周りの奴らの思いに気付けばいいんだが。その鈍感さは何なんだって言いたくなる。

さて、次の戦いは、どうやって戦おうか。

僕はルークに勝つのが目標で、だから、勝たなきゃとそう意気込む。

ルークは”天才”だけれども、勝ちたくてたまらないんだ、僕は僕の将来やりたい事は軍に入って、戦う事なんだから。”天才”だろうとなんだろうと、勝てるようになるなきやどっちにしろ上には上がれないんだと思うし。

努力が、天才に勝てるかどうか、なんて僕にはわからない。でも、それを証明できれば、いいのにつて思う。

そんな事を考えながら、舞台の上に立つ。そうして、前から対戦相手がやってきた。

金髪の男だった。ルーク同様イケメンという奴なのか、観客席から女子生徒達が騒いでいるのがわかる。まあ、確かに顔立ちは整っ

ているし、女受けしそうな顔してる。

実力は未知数だ。

だけど、勝ちたい。そう意気込んで、僕はまっすぐに男を見据えた。

男もこちらを見つめている。そこに温かさも何もない。笑み一つも浮かべない。いうなれば、無表情という奴だろうか。だけど、周りはそれでも、男に好意を持つ者が多いようだ。クール系という奴なのだろうか？ ああ、そういえば誰かがクールな男子はかっこいいとかいつてたっけ。僕はそんな事あんまり思わないけど。

というか、外見重視だよな、結構皆。性格も大事だろうけど、外見がよければどんな性格でも、性格が最悪とか以外なら、騒ぐもんだと思う。

『それでは、ユウ・リルド対フォークス・ルネアスの試合をはじめます』

そうして、僕とそいつの試合が始まる。

どんな奴かというのは一切わからない、僕は奴をじっと見据えた。先に動くべきか否か、それを試行錯誤する。

ひと時の間、どちらも動かなかった。

先に動いたのは、フォークス・ルネアスの方だった。腰にかけられた長剣を引きぬき、地を強く蹴る。そして勢いよく、こちらの方へと向かってくる。

僕も、『亜空間』から長剣を取り出し、その攻撃に答える。僕とそいつの、長剣が互いに交差しあった。

金属のぶつかり合う音が響く。そんな中で僕は奴の行動を見逃さないように、奴を真つすぐと目でとらえる。

——アースは僕に、戦い方を教えてくれた。

そうして、その時に、一番に教えてくれたのは、敵の隙を見逃さない事と、油断しない事。油断するという事はあってはならないの

だ。戦いの中で。

長剣の交差を何度も何度も繰り返していたとしても、勝負は決まらない。僕が動くか、奴が動くか。

僕は、奴の長剣に答えながらも、呪文を言葉に紡ぐ。

「求めるは、灼熱。願うは、煉獄。
燃えよ、燃えよと我は求める。」

《ファイアーブレスlevel14》

level14ぐらいになると僕ぐらいの魔力だと結構魔力を食ってしまうんだけど、相手が強いってのはわかるから、出し惜しみしてても仕方がない。それに、隙さえあれば魔力回復薬だって常備している。なにかをしながら魔法を行使するって行為は結構疲れるし、難しい。level14ぐらいの魔法でも、いままで僕はどっと疲れがきた。

でも、目の前の男を一端ひかせられたならそれはそれでいいのだ。フォークス・ルネアスは僕の魔法に一端ひいた。とはいっても、防御系の魔法は使っていないはずだから少しは食らうはずだけれども、なんともないような顔を奴はしている。

もしかしたら、炎が聞きにくくなるようななにかを事前に装備でもしていたのかもしれない。

そんな事を考えながらも、僕は『亜空間』から、あるものを取り出した。

僕が自分で術式を編み込んだ魔法具である。

——さて、これを使って勝つために、色々と準備をしなければ。

そう意気込んで僕は動き出した。

本選第二回戦（1）（後書き）

遅くなってごめんなさい。

勉強最近忙しくて、書く気になれてませんでした。

あと短くてすみません。

本選第二回戦(2)

僕が取り出したのは一つの鏡。小さな手の平サイズの鏡だけれども、これも魔法具の一種である。

それと同時に僕が取り出したのは、数本のクナイ。東方の忍者とかいう職業の人達がこれを使らしい。で、僕はこの忍者に少し知り合いがいるから、習った事があるんだ。

横から投げるようにして、クナイを投げる。そして、見た事もない武器に相手が戸惑っている隙に僕は駆けだす。そうして、その中で、手のひらに存在する鏡で、相手を映し出す。

それは、”鏡に相手を認識させる”ため。これは、そういう魔法具だから。

ちゃんと認識した事を確認すると、僕はそれをポケットとつつこみ。その鏡と対になっているもう一つの鏡を取り出す。

それと同時にフォークス・ルネアスは呪文を唱える。

「聖なるチカラよ、我に力を貸せ。

滅ぼすは、邪なるモノ。

我が請うは、聖なるモノ。

《ライトアローlevel18》」

それと同時に現れるのは、大量の光の矢。数えられないほどの量がその場に出現する。

これは、食らったらヤバいな、level18だし、と冷静に頭の中で考えながらも僕は手に持っている鏡で、その矢を映し出す。

そして、矢を認識させる。うまくいくかはわからないけど、この魔法具に術式が予定通り組み込まれているならできるはずだ。そう、自分を安心させる

そうして、フォークス・ルネアスが僕へと狙いを定めて、矢を一

気に僕に向かわせていく。

そんな中で、僕は、鏡の縁に取り付けられているボタンを押した。

———そうして、魔法具。《合わせ鏡》が発動した。

僕に、あらゆる方向から向かってこようとしていた矢は、軌道を変える。そしてそれは———、次々と僕が手にしている鏡の中へと吸い込まれていった。

「なっ———」

それに声をあげたのは、フォークス・ルネアスである。

当たり前だろう、自分が行使しているはずの光の矢が、自分の意思に反して軌道を変え、吸い込まれていくのだから。

《合わせ鏡》はそういう魔法具なのだ。一つは、今見せたように”認識したものを吸収”する働きがある。そうしてもう一つの鏡は———。

「お返しするね」

僕はそういって、対になるもう一つの鏡———先ほど”相手を認識した鏡”を取り出し、ボタンを押した。それと同時に鏡の中から次々と先ほどの矢が姿を現す。

そして、現れた矢はフォークス・ルネアスめがけて飛び交った。

そう、もう一つの鏡は、一つの鏡で吸収したものを、”認識した相手に向かって放出する”という働きを持つものなのだ。

本選第二回戦（2）（後書き）

更新遅くなってすみません…。
しかも短くて申し訳ないです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2680t/>

ハーレムなんかにまきこむな！

2011年12月29日18時08分発行